

# みんぱくリポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology Academic Information Repository

## The Diary of Hisakatsu Hijikata ( I )

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-07-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 土方, 久功 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00001075">https://doi.org/10.15021/00001075</a>

# 土方久功日記 第5冊

## 1923年11月28日～1924年5月26日（大正12・13年）

### 解説

この第5冊で、一つの出来事は、大正12年（1923）の暮も押し迫った頃、ヨーロッパから、土方与志が帰国した事である。与志は、留学先のベルリンの地で、関東大震災により東京が焦土と化したとの報に接し、ベルリンを発ってモスクワへ行き、滞在中に演劇を鑑賞し、シベリア鉄道経由で帰国した。帰国後、直ちに、留学を早く切り上げたために使わずに持ち帰った資金をもとにして、商業資本に毒されない小劇場の設立に向けて精力的に働いた。

そして、久功の家族は、この年12月27日、与志の帰国とほぼ時を同じく、上目黒から杉並村へ転居した。

この第5冊のなかで、久功の家族に大きな影響を与えたのが、祖父・柴山矢八の死去であった。年が明けた大正13年（1924）1月23日の夜、鎌倉で祖父の柴山矢八が脳溢血で死去した。通夜の後、28日に、青山斎場で葬儀が行われた。青山の通りには、水兵が三町も並んで、「捧げ銃」で靈柩を迎え、柩車の両側には、六人の海軍大将が陪柩者として静々と歩いていった。斎場には、元帥をはじめ、数百の海軍高官を以って埋もれるよう、祭壇は宮家をはじめ鎮守府長官、艦隊司令からのたくさんの榊と花環とで飾られていた。久功は、「祖父が、こんなにもことごとしくされるような偉い人だと云ふことを、今まで知らなかった。」と日記に記している。そして、それに比べて、父の葬式が、「ほんの五六台の人力車が、稻の穂の漸く重たげな田畠道をうね～とうねって行った。それが葬式の総べてだった。」のを思い出し、何故か落ち着かなかった。

祖父・矢八は、母・初江が初めての子で、たった一人の娘であり、また、久俊、久功が初めての孫であったことから、幼い頃より、久功等兄弟をとても可愛がってくれた。その祖父が亡くなったことにより、久功の家族は、いっそう経済的に逼迫したようであり、それが久功を苦しめた。

2月12日には、「家に帰って来ると、昌生叔父様と譲二叔父様が来て居る。なき話がはなされる。昌生叔父様は、八時半には鎌倉に帰ってゆかれる。譲二叔父様は、十一時過ぎまで駄弁ってゆく。」と書かれている。そこでは、おそらく、久功たち家族の今後の生活のことが話し合われたのであろう。この後しばらく、久功は、精神的に不安定になっているのが、日記からわかる。

3月24日は、美術学校の卒業式であった。久功もめでたく卒業できた。翌日は、卒業制作展で、その帰り、小城保、中井惣之助と、銀座、日本橋を明け方まで飲み歩いた。久功は、美術学校を卒業したとはいえ、その先のあてはまったくなかった。

5月8日に、久功は、日記に次のように書いている。  
「実に不愉快な日だった。恐らく生れてから今迄に、不愉快さに於てこんな不愉快な日に逢ったことがない。実に不愉快だった。」

翌日には、次のように書いている。

「昨日の不愉快が、だにのようこびりついて、朝から何にもしない。」

日記には、具体的に何があったのか書かれていないのでわからないが、5月20日に、鎌倉から叔父の昌生が来て泊まってゆき、22日には、久功の家族はすぐ近く（杉並村619番地）に引っ越ししているので、一家の扶養に関し、あるいは久功の就職に関して、何か話されたのであろう。

それに追い討ちをかけるようなことがあった。5月14日には、3日に結婚した本多正震の家に招かれた。そこには、学習院の同窓生が9人来ていた。彼等はみな高等科へ進学し、今ではそれ相応の地位を得ていたであろう。翌日の日記に、

「一日家に居て、自分の壁部屋にとじこもって居る。昨日の今日だ。どうもみじめでいけない。其の上、時が大変に悪い。先日来、と云っても、もう余程以前から本が読めない。殊に組織立ったことが何一つ出来ない。頭は馬鹿のように散漫になって居る。永いこと手紙一つ書かない。」と書いている。

久功は、精神的にかなり追い込まれていたことが分かる。

また、興味深いのが、2月1日に書かれた小城澄子への手紙の中で、日記を書く動機、目的等について書いていることである。

「あなたは雑記帖を一冊先づ求めるのです。そして毎日毎時、あなたの心の影をそれに記して御覧なさい。そこにあなたは、朝六時に起きてお掃除をして、御飯をたべて学校に行って……などと書かないで、例へば、私に下さった御手紙に書かれたようなことをでも、歌でも、詩をでも、又は涙をでも書き綴って御覧なさい。歌や詩は慣れないうちは、その為の努力に飽きたり、まとまらなかったりしますから、御手紙の形式が一番いいようと思ひます。」

「兎も角も、やって御覧なさい。慰められますよ。私の日記も、一つにはそんな動機から始めたのですが、今ではほんとにいいことをおぼえたと思って居ます。」

久功の日記も、父・久路への手紙の形で書かれたことから始められたのである。

[5]

〔表紙〕

千九百二十三年十一月二十八日より 千九百二十四年五月二十六日迄

大正 12—13

功]

〔見返し〕

〔尊敬と親愛とを以て 亡父に捧ぐ 久功〕

〔扉〕

〔×を附したるものは別に原稿紙に移したるもの〕

### 十一月二十八日

朝、いつもより早く久顕さんと一緒に家を出て、目黒の駅に出て学校に行く。目黒の駅に出る途々、私達は八九年前にここらに住んで居たことなどを思ひ出して、併し変りはてた新らしい家や原を見ても別段の哀愁もなく、僅かに残って居る川端の藪の昔ながらの小さな思ひや、其頃は一面の田畠だった処、私達が小川にブリキの舟を流したり、どぜうや目高をすくった辺が今、新らしい固い路になり、安普請の店などに変って居るのを見ても、人事のような思ひを、それでもぱつりぱつり話し合って行く。長い坂を、前にも後にもひききりなしに入々が忙がしげに登って行くのも、考へて見れば変った眺めだった。朝は、小波のような雲の間に、黄色い日が霞んで居たのが、三時に学校から帰る頃にはどしゃ降りの雨で、路はきたならしくぬかるんで居た。而してつく～と田舎道の長いのにあきれた。

### 二十九日

今日から学校の教室に、立派な紅茶が入るように備へて、午後四時まで仕事をした。天気はどうにか持つて居る。すっかりへたばって、五時半過ぎて家に帰ったが、晩食に元気をつけて、夜は遠山サンの家に遊びに行く。

### 三十日

一日学校に行って居るので、何も出来ないで、毎日～いら～した気分が自分をはなれない。其れも、自分の学校の仕事が思ひきってはかどってくれさへすれば、本も詩も暫らくは天井裏へ逃げたとてかまひはしないのだけれども、明日は十二月ぢゃないか。冬とは云っても、まだ～今年は暖かい。けれどももう、白いものが降るようになるのも近いうちだらう。

夜は遠山サンの奥サンが遊びに来て、保ちゃんが来て、惣ちゃんが来て、遅くまで騒いでゆく。

## 十二月

一日

或る夜私の夢に

私は黒い大きな影を見た

それは真黒で鮮かではあるけれども

広くて大きくて

かげろふのように見わけ難い影だった

で、私は光の元が何処にあるのか

又、何であるかは知らないけれども

私はそれが私自身の影であることを知った

それが又、私の父の影であることをも

私の父の父の

遠い遠い父達の影であることをも私は知った

つまりこのかげろふのように見わけ難い

広い広い蔭の中に

生きとし生ける私自身の命が、魂が

静かに息づき、生きて居るのを私は見た

それ故私は知つて居る

人が彼自身を見わけ難いような

彼自身を意識し得ないような時には

彼の命が、魂が

静かに静かに

けれども何んな風に大きく息づくかを

又、彼の智恵が

真黒に見わけ難くはあるけれども

何んなに広く深く澄みきって居るかを

私は知つて居る

[×を附す]

---

中井サンの兄サンの、も一つの首を石膏屋にやる。良サンも今日から兵隊サンだ。

## 二日 sunday

くだらない日曜日である。冬らしい日が霞んで、風もないのに寒い。

自分は朝が何んなにして過ぎたか知らない。昼少し前に、久顕サンと二人で家を出る。九段まで出て、富士見軒で昼食を取って、田辺サンに行く。自分で持つて行った用事がまるで解らないで、結局明後日、誰か再び行くことを約して、田辺サンを辞して、牛込の三越マーケットに行く。ここでも買物がととのはないで、神楽坂を下りて用事をたして、日暮前、物足りない心で帰つて来る。家の中がごた～して居る。皆がざわ～しておちつかない。夜が十時になるまでに、すっかり労れてしまふ。自分はくだらない明日を夢みて、もう寝る。

## 三日

何とまあそら～しい寒さだこと、寒空だこと

ぶる～と顛えてみても

ただ寒いこと

乞食のように

口の中でぶつ～云つてみても

猫のように黙つて居ても……

おやおや

赤ん坊のおしつこからケムが出て居ます

[×を附す]

急に厳寒が何処からともなく襲つて来る。日暮方暫らく冷たい雨が降つたが、直きに止んで寒い寒い。保ちゃんがマンドリンをさげて遊びに来て、十一時半まで遊んでゆく。

## 四日

学校のかへり、田辺サンに行く。何うにかかうにか兎に角に、申告書を書いて貰つて、九時に家に帰る。べらぼうに寒い。朝から晩まで、七八十もくしゃみが出続ける。苦しい。くしゃみが五六つ続けざまに出ると、目の心が痛む。痛みをこらへて居ると、涙が出る。鼻水がだらしなく垂れる。電車がこむ。やたらと寒い。

## 五日

煙草がまづい。

## 六日

雨。道がぬかるんでぬかるんで、川の中か田圃の中を歩くよう。午後、惣ちゃんと大久保の中井サンの処に、文治郎兄サンの肖像を持って行く。姉サンが留守だったので、玄関迄で帰る。帰りに小城サンへよって、十時過ぎまで遊んで来る。暖かい。

## 七日

トルストイの「闇の力」を読む。一幕、二幕、三幕、四幕、改定四幕と、内容よりも「うまさ」に引かれて興味深く読んでは来たが、五幕に入つてトルストイらしい臭ひがぶんと鼻をつく。何のことはない、子供をつかまへて、「人に合つた時は今日はと云ふんだよ」と、おしへて居るようなものだ。ずっと前に読んだ「生ける屍」の方が、はるかにいい印象をのこして居る。アンリバタイユやら抱月やらにつゝきまはされた「復活」の方が、これよりはまだ～余程いい。

---

暗い、暗い、自分はこんなにも暗いものを見たことがない。自分はこんなにも急に物事が、状態が、考へが、暗闇の中に落ち込んで了ふことがあり得るとは考へなかつた。知らなかつた。空は鉛のように重く、動かない。土はじめ～して、あらゆる想ひを、考へを、思ふさまに乱し、蔭惨な闇へと引入れずには居ない。道はぬかるんで、ふか～と落ち込んだり、山のように盛り上つて、目を射り、耳を突き、心を極度に勞らせる。私は勞れて居る。私はもうつかれきつて居る。

## 八日

情ない日が紫紅色の蔭氣な光を投げる。いつになく遅く七時半に目が醒めると、頭が重い。学校を十一時半に止めて、惣ちゃんと香蘭女学校<sup>236)</sup>のバザーに行く。小城サンの連中も来て居る。帰りに小城サンに行く。文ちゃんも帰つて来て居たので、歌留多をとつて遊ぶ。中井サンが思ひがけなく外出して來たので、十一時までも話し込んで帰つてくる。お正月らしい気分も何処にか匂つては來たけれども、自分の心の何処かには、病的な闇が重く執念くとりついて止まない。

## 九日　sunday

私は何処と詫ばずせわしく歩き廻つた  
ぬかるんだ畑道を  
原を、暗い森の中を

私は造物のような楓の紅葉を見た

私は冬枯れの遠い櫻の立木を見た  
 灰色の悲しい空の中に  
 高く高く灰色の悲しい眺めである  
 私は又暗い常盤樹の杜を見た  
 冬の眺めの中のどす黒い青は  
 いぎたなく、不徹底なものである

湿った黒い土に山茶花の花が  
 思ひがけない暖かな薄桃色に  
 併しみじめに  
 ベっとりと散って居るのを私は見た

私は細い道に添うて  
 ほんの二本か三本の電線が  
 電柱から電柱へ何処までも  
 灰色の無限の空を切って居るのを見た

私は古い森の中の  
 古い大きな寺を見た  
 人の子一人居なかつた  
 何時の世から残されたものか、問ふ人もない  
 古い鐘楼に黒い大鐘が  
 鬱々たる四隅との默契を守るように  
 固い沈黙を以て重々しく下つて居た  
 私はこの古い鐘楼とこの鐘とが  
 かつて幾度か、年老いた小心な乞食か  
 又は氣の毒な泥棒か人殺しの為に  
 優しい一夜を守つたかを考へた

私は又この寺に続く  
 荒れ果てた墓場をも通つた  
 そこで私は無気味な死人の臭ひのかはりに  
 不思議な思ひを以て  
 なぜか懐かしい床しい  
 静かな匂ひに出逢つた

私はふと  
〔豪〕  
丘の上の傲奢な西洋館の下を歩いて居た  
私はのべつたらな寒い向風を感じて居たが  
西洋館の沢山の窓からは  
厚い窓かけの隙間に  
明るい電燈が煌いた  
私はこの西洋館に  
怜俐な若い娘が居るのを知って居る

私の前に急に広い眺めが開けた  
私は遠い彼方に人夫等の一群を見た  
人夫等はこの冬の日暮を  
重い土かきを以て  
土か又ごみを投げ合って居た  
薄闇の中に、遠く  
彼等の白い姿が不規則に、ゆるやかに  
伸びたりかがんだりするのを見ながら  
私は細い坂道を曲った

私は古い田舎家の前で  
狂者のような女を見た  
髪の毛を乱して、とりとめもない瞳を  
女はまともに私に向けて居たけれども  
女は何も云ひ出ようとはしなかった

私は何処と詰ばず  
丘を、原を  
冬の日暮のよごれた道を  
せわしく、大股に歩き廻った

彼女の瞳に、彼奴の前に  
薄闇の中に  
私は狂者だったか  
それとも幽靈だったか、何うして私が知らう

十日

〔五郎〕  
細雨。夜、遠山サンに蓄音機を聞きに行く。

[欄外に記す]  
[焜炯]

寒い冬の日の日暮前である  
私はコンロの傍にコーヒーを入れながら  
窓硝子に霜のように積んでゆく  
小さな小さな雨の事を  
一人つくづくと眺め入った  
私はその細かい事の音を聞かう為に  
静かに耳をそばだてた  
たった一つの事を聞かう為に……  
けれども私は私の心臓の中に波うつ  
幽かな私の血を聞いていただけだった  
私はコンロに手をかざして、身をよせて  
一人しみじみとさみしかった  
その小さな事の中に  
私は何物をも聞かなかったから  
理解しなかったから  
そしてそれが私の孤独を  
孤独の静けさをいたく深めたから

十一日

どんよりと曇って、道が益々悪い。五時半に家に帰ると、まづい飯をかきこんで、ぐってりとソファーの上にねころんてしまふ。夜、遠山サン夫婦が来る。遠山サンは、昨夜遅く帰京したのださうな。夜になると晴れて、新月が冷たく照って、外は寒くなる。

十二日

天気は晴れたけれども、相変らずつまらない。

十三日

三時に教室を出ると、雨になって居る。大分前から降って居るらしい。電車の中で酔漢と隣りあはせて、地震当時の官獄の有様を細かく聞くことが出来る。濡鼠のようになって帰って来ても、家ではたいしたものも待って居ない。

勞れて居る。雨が降る。寒い。

十四日

どんよりと一日曇って居る  
一日一日と日が過ぎても  
(同じような毎日だって  
みんな違った一日の筈だのに!)  
どの日も次ぐ日も退屈なことだ  
(同じような人々だって  
みんな違った心を持って居よう!)  
どいつもこいつも  
おゝおゝ、猫も杓子も  
違った毎日を毎日を  
同じことばかりくりかへして居やがる  
せめては飛んで出ろ  
誰でもいい、虎でも、ひしゃくでも!

[×を附す]

---

何だって世の中がこんなに退屈になったのだ  
新聞屋は毎日新らしいものを見つけてゐるが  
俺は一度だって新聞に新らしいものを見たことがない  
そして一日は前日よりも退屈になってゆくのだ

どうも世の中の奴等が利口過ぎるんだやあるまいか  
なぜ  
何故と云つて、みんながみんな馬鹿だったなら  
後を向いた奴には  
お日様が西から昇つておいでなさらあな

[×を附す]

---

何うも退屈だ  
何と云つても退屈だ  
なぜと云つて、世間の奴等は  
何だって揃ひも揃つてしちっかたいのだ

冗談にでもかまはない  
 お日様が三角だと云ふ奴には  
 云はして置け、云はして置け  
 お日様は三角なのだ！

[×を附す]

女が猫のような声で  
 「あなた……」と云って言ひよったら  
 用心しろよ！  
 女が「私……」と云って  
 まともにお前の瞳に見入ったなら  
 用心しろよ！

だが、よい程に憐んでやることをも  
 忘れないでやるがいい

[×を附す]

### 十五日

今日も又どんよりと曇って寒い。  
 午後、音楽学校の演奏会に行く。

曲目は、一、管弦楽「神々の黄昏」中の葬送進行曲（ワグネル）二、管弦楽 エグモントの序曲（ベートーベン）三、ヴァイオリン独奏 コンチェルト第五番（ヴュータン）——安藤女史 四、管弦伴奏混声合唱「畏しや神」（シューベルト）五、ピアノ独奏 謝肉祭（シューマン）六、管弦楽「オベロン」の序曲（ウェーバー）。久々で管弦楽を聞いて嬉しかった。殊にはじめの二つ。其の中でも、第二のベートーベンは好きだった。合唱ときたら、てんでひどいものだった。

晩は小城サンに行く。

### 十六日 sunday

天気晴朗。ぽか～と暖い処で日向ぼっこで、石膏の色づけをする。午後、九頭龍女学校<sup>237)</sup>にバレーを見に行かうと思って居る所へ、丁度小石川の梅子サンから切符が送

って來たので、母と行く。

〔岩村和雄〕

和チャン。久しぶりで、しんみりしたいいものを見せて貰ったことを喜んで居ます。御礼のかはりに、簡単な感想を書いて見ます。

先づ、各々のものに就いて簡単に思ひ出して見ます。デュビッシーのプレリュード、いいと思ひます。殊にピアノがテーマを繰りかへす度に同じポーズに帰って、アカリの下に帰ってゆくのは、効果があるよう思ひます。只、終ひの方で左廻りして後へ帰つてゆく所で、思ひ出したように二つほど大きく跳ねる所がありますね。一寸面白い所です。あの面白い所を非常にまづく演じられたのは、残念でした。静かな動きからあのしぐさに行く過程と、あのしぐさから元の静けさにかへる過程が、大変に不自然に演じられました。あれは踊手の罪で、踊手はあゝ云ふ所に極めてデリケイトな注意を持たねばなりません。

オアースの死は、今日のうちで一番美しく、且よく演ぜられたと思はれます。只——これは、どれもについて云はれることですが、殊にオアースの死は、是非オーケストラで、或はいいヴァイオリンでやってほしく思ひました。ピアノのぼつん～は、幾分でも滑らかさを邪魔します。レコンシリエイション、ポルカ、可愛らしいものです。衣裳も大変に上品に優しく思はれましたし、二人の踊手もよく気分に浸つて居るようでした。二階から見て居て、二人の足跡によってプランに引かれてゆく線を綺麗だと思ひました。蝙蝠座の印象、やさしいだけに無難でした。

バロックよりロココへ——一寸そんなことを思ひました。の方がよかったです。表情としぐさとがぴったりして居たように思ひます。男の方に、少し愛嬌があつてほしく思ひました。

第六シンフォニー。よくあれだけの人々が君の云ふことをきいたと感心しました。まったく、あれだけにまとめるには大変だったでせう。蹲った影のような群像の中に分ける二人の、静かな静かな歩みが目に浮んで来ます。ですが、蓄音機はまあ貧弱でしたね。ショパンのプレリュードは、デュビッシーのプレリュードよりも更に短かく、殆どあっけないようでしたが、更に更によく演ぜられたようです。あの平凡な衣裳が、何故か不思議に頭に浸み込んで居ます。あらはな片腕をダラリと下げたポーズと、プティート・ストの第三、ミニュエットはよくおぼえて居ません。裸体の「よさ」と「わるさ」とを、一所に見せられたように思はれます。何故なら、日本人の裸体そのものがあまりプロポーショナルでない為と、一つには踊手が眞の裸体の線だけで踊るまでに、技巧が洗練されて居ない為と思はれます。プティート・ストの第四、パレー。アイディアは大変に面白いと思ひます。も少しそく演ぜられたなら、今日のうちで一番いいもの一つになれるのですが、残念なことに、あまりうまくゆきませんでした。一体日本人は、

ユーモラスなものに対して鈍感なようです。踊手が皆しぐさよりも気分に退屈して居ます。日本人は通常の生活の中に、洗練されたユーモアと云ふものを、全く稀にしか持つて居ません。そんな処から、四人の踊手の気持がまち～だつたことが一番大きな打激でもあり、目につきました。これはしぐさとちがって、手をとつて教へることが出来ないものですから、無理な苦情かも知れませんが、踊手諸君には絶対に必要なものですから、何うにかして解らせたいものです。

最後のワルツ・ブリリアントは、あまり感心しません。一つには、二階から見た為に、完全なブラック・エンド・ホワイトの効果を見ることが出来なかったのを残念に思ひます。床のダルな色がそれをひどく妨げましたから、これで先づ各々について勝手なことを云はせて貰ったわけですが、そしてこれから全体としてはと云ふ処なのですが、そして云ひ度ひともまだ～あるようですが、もうつかれましたから、これで止めます。

#### 十七日

晩は保ちゃん、惣ちゃん、遠山サンの奥サンが来て賑やか。

#### 十八日

毎日天気が好いが、めっきり寒くなる。晩は保ちゃん、惣ちゃんが誘ひに来たので、家中で遠山サンに行って、テーブルを囲んでポーカーを教はる。冷たい月がだん～太る。

#### 十九日

#### 二十日

学校のかへり、竹田<sup>238)</sup>の処に行き、夕方、竹田と溝口の処を訪ねる。遅く帰ると、関口氏が来て居る。

#### 二十二日

朝起きると、冷たい堅い雨が降つて居る。で、ひどく気をそがれて了つたけれども、小城サンで温まって、保ちゃんと惣ちゃんと三人で音楽学校の土曜演奏会に行く。案外に大変面白い。帰つて来ると、遠山サン夫妻が来て居る。

#### 二十三日 sunday

朝から甘露寺を訪ね、江波の新築を尋ね、江知勝<sup>239)</sup>の同級会に行く。出席十五名。あんまり面白くない。湯地の処へ行って宿つてしまふ。

## 二十四日

一日気持が晴れ～しない。学校に行って、三時過ぎ家に帰って、七時には寝て了ふ。

## 二十五日

〔土方与志〕

昨日、久敬が帰って来た<sup>240)</sup>と云ふ電報が来て居たので、早速小石川へ行ったが、丁度入違ひに出た後で、逢はなかった。

夕方から久顕サンと銀座に出て、真白なパーラーの二階でクリスマス・ディナーを食べる。暮らししいからつ風が吹いて夜が冷える。

## 二十六日

急に明日、中野の方に引越すことになったので、朝からぼつ～荷物を片づける。○  
晩はお別れ方々、皆で遠山サンに行って遅くまで遊ぶ。

## 二十七日

朝から荷物を造るので、ごた～して居る。十時半にトラックが二台来て、荷物を乗せて出る。丁度出ようとする処へ、田辺サンの英サンと国サンが來たので、一緒に今度の家に来る。荷物を一通りかたづけて、さて明日から落つければいいが。

---

私と云ふ馬鹿が  
人を憎んで憎みきれず  
わが身をいとしんで人を愛しきれず  
冬月の丘を歩いても  
無縁の心は安らかな筈がなく  
暗い森の中にじまの叫びを聞けば  
われにもなくあわてながら  
又も明るみへ出るならば  
おゝ、そこにも人が居る  
ここにもよそ人の目と耳がある  
されば兎も角も  
憎しみのさなかにも  
決して充たされない心に  
喘ぎながらも、戦きながらも  
あゝ、夜と云ふ  
夜と云ふ忘却の隠屋に

そっと首だけをのぞかせて  
 ——憎め、憎め  
 呪へ  
 お前に近しいものの中にこそ  
 お前の心を亡ぼす敵がある  
 お前の渴きを癒すものは  
 愛ではなくて反対に憎しみである  
 いとも親しげな笑ひの中にこそ  
 永遠の罠を築く幽靈が住んで居る  
 さらば憎め、憎め  
 呪へ  
 おゝ、けれども、それにしても  
 愛よ、愛よ!——  
 私は満たされない愛を  
 私の決して知らない愛を頼み、あやぶみ  
 さて兎も角も  
 夜と云ふ忘却の臥所に  
 ほんの暫しの安息をかけるのです  
 私と云ふ馬鹿が

〔×を附す〕

## 二十八日

朝から久顕サンと上原サンに行く。おばサンが一人でぼつんとして居たが、勝ちゃん<sup>241)</sup>が帰って来るし、春チャン<sup>242)</sup>も帰って来て、一緒に昼御飯を食べる。春チャンと長いことはねについて遊ぶ。

## 二十九日

日は照ったけれども、恐ろしく寒い一日がやっとのことで暮れる。もう永いこと夜明を待つような心を味はったことがない。反対に日々日暮と夜の、なんともないけれども、静かな休眠を楽しむような毎日を送って居る。

ストリンドベルクの白鳥姫を読む。美しい物語である。それは、メーテルリンクの「アラディンとパロミデス」を思はせる。けれども、メーテルリンクの透き通った美しさに對して(メーテルリンクのは作の調子のように、思想も又単純で透徹して居る)、これは混渾とした中に沢山の暗示をこめて居る。ここには「ブルー・ブック」の中にある、スウェーデンボルグ的な奇蹟と「地獄」の中に、一面にちりばめられた恐ろしい默契と

が入り乱れて居る。と云ふよりも、後者から前者が生れ出ようとする悩みと、希望予期であるかも知れない。

訳語が大変に上品さを欠いて居るので、時々興をそがれたことを恨む。(故中谷徳太郎氏訳)

### 三十日 sunday

寒い。朝から晩まで、終日机の傍に腰かけたまゝである。

母は午後、鎌倉に出かけたし、午過ぎになって兄がひょっこり帰って来たが、十五分居ただけで又々出てしまう。弟は部屋にとちこもって、こつゝへ何かし続ける。で自分は一体何をしたのか。本を五十頁読んだ。併し終日かかって五十頁読んだと云ふことは、読まなかつたのと結果に於て同じことだった。それから煙草を吸つた。これは又、舌が焦げる程吸ってしまった。それから自分は、終日顛えて居た。そのくせ自分は火の気にあたつて、頭が馬鹿になつて居た。それから縁側の硝子戸を通して、薄陽が照つたりかげつたりした。それから丁度そのように自分の考へが、輝いたり消え込んだりした。それが自分を蔭鬱にした。併しそれが自分に一つの思想を持って来なかつたとは云へない。自分はその思想を、ここに分解することはすまい。けれども若しもこんな日が永く続くならば、自分は何かし出すことが出来るようと思はれる。

### 三十一日

朝から石膏屋に行って、勘定を払い、松坂屋へ行き、丸ビルに行って、一時四十分の汽車で鎌倉へ行く。晩方、兄もやって来た。昌生叔父様も帰つて居られる。

## 大正十三年正月

### 一日

島村サンの人達が揃つて午後來られたが、日暮前には帰つて行かれる。讓二叔父様が英昌をつれてこられる。酒。

### 二日

起きぬけに、兄と東京に帰る。東京駅から銀座を歩いて、目黒に行く。自分は遠山サンに行って昼御飯を御馳走になつて、三時に小城サンに行く。中井サン、嘉瑞サン、橋口のおばサンと、ケンチャン、遅く遠山サン夫妻。酒、酒、かるた。

### 三日

小城サンの人達、嘉瑞サンと木島<sup>243)</sup>サンに行く。酒。遅く家に帰る。

## 四日

上原<sup>244)</sup>サンに行く。嘉瑞サンが来る。〔本田不二磨〕不二サンが来る。〔上原〕孝雄サンも一緒に六人して、川上の伯父様の処におしかける。酒。晩皆で上原サンに帰ると、食卓が待って居る。河原のシュンゾーサンが来て居る。酒、酒。遅く家に帰る。

久顕サンが青田の増子サンからの贈物を届けてくれる。京都の桜井屋の赤と紫と金と時色との封筒が十四枚! 私の百枚の封筒が火災で焼けてしまった為である。けれども本当は、私は五枚の封筒を持って居ただけで、其のうち四枚を焼いただけである。とまれ、私は有難く黙って頂いておく。

## 五日

労れてしまつて、日向ボッコで寝て居たら、孝雄サンと不二サンとが来たが、玄関で帰つてゆく。午後、久顕サンと篠塚に出かける。君チャンの処へ一寸よつて、宇多チャンの処で一寸話して、日暮に帰つて来る。雨になる。早く寝る。

## 六日

昨夜の雨は続かなかつたらしく、いつものように好い天氣である。十時頃から小石川へゆく。岩村が宿つて居る。昼食後、山田耕作サンが来る。高野が来る。伊藤の国サンが来る。止められたのを、田辺サンによばれて居たので、明日行くことを約して、四時には田辺サンに行く。皆の都合で、今日の集りを昨日やつてしまつたそうで、ひっそりとして居る。八重子サンの処に皆が集つて居ると云ふので、行って見る。貞子サン、幸子サン姉妹、英サン、静枝サン達に大人の連中もまぢつて大童になつて、かるたがはづんで居る。田辺サンに帰つても、久顕サンが来ない。一人でチビ～やつて居ると、六時に久顕サンがいい氣嫌でとびこんで来る。〔機〕川村の処でひきとめられて飲んでしまつたそうで、十一時半に田辺サンを出る。

## 七日

労れで了つて居るので、午前中はぶら～して過してしまふ。夕方になって、約束なので小石川に出かけてゆく。〔千田是也〕國サンが居る。〔岩村和雄〕和サンが居る。〔精〕和田サンが居る。〔伴田恭助〕アサリサンが居る。で地下室を片づけたりして、労れで酒になる。友田サンも来る。友田サンが先づまゐつてしまふ。アサリサンがまゐつてしまふ。國サンがまゐつてしまふ。兄がよっぱらつてしまふ。和サンがよっぱらつてしまふ。久敬と自分と。そのうちに、和サンがナイフを以て自分の手の甲に刺してしまふ。血が壁をそめる。床を流れる。而して十二時近くなつて医者がやつて来る。

### 八日

八時前までよくねる。起きて一わたり、昨夜の痕跡を調べる。久敬の室の壁に、深々とナイフがさされて居る。地下室にまでも血がかたまって居る。昼前になって、皆がぼつ～起きてくる。園池<sup>245)</sup>サンが来る。日暮前にアサリサンを残してひきあげる。

例によって、岡村の命日なので、原宿に出かける心算だったが、そんな訳で止めてしまって手紙を書く。早く寝る。

### 九日

学校へ行ったけれども、約束して置いたモデルが来ない。帰ったら文チャンが来て居る。今日、サワが鹿児島に帰って了ふ。

一時半就寝。

### 十日

文ちゃんと一緒に学校に行く。モデルが来て居る。明日から始めることにして、小室とおとしさん<sup>246)</sup>と三人で松坂屋へ行く。別れて江波を訪ね、日暮に帰る。早く寝ようと思って居ると、榎本が一杯きこしめしてやって来て、十時過ぎまで喋ってゆく。

### 十一日

今日から学校で卒業制作の為に、胸像をやりはじめる——。

何うもいけない。体の具合も別段悪くもなし、事件もないのだが、何うもいけない。電車もあまり込まないし、煙草もたいしてまづくもないのだが、何うもいけない。くだらない用事の後に、くだらない用事が出て来る。そして毎日が毎日のように、自分を不満へと、不愉快へと追ひ立てる。人が来る。夜が寒い。何かしたいのに別段することがない。時間に羽が生へて飛んでゆく。そして夜になると、早く労れて了ふ。近頃は、生も死もたいして自分を煩はさない。近頃は道徳も倫理も、さては堕落もたいして自分を妨げない。けれども金がない。一体金の為に少しでも気を使はなければならないと云ふことは、実に馬鹿馬鹿しい。だがまあ、有難いことに、お天気は毎日晴々して居るし、赤ん坊はおとなしい。

---

貴様は一体誰だ、何者なのだ

俺が左側を通らうとすれば、右に来て

俺が反対によければ、貴様と云ふ馬鹿は

更に反対にやって来ては俺を妨げるのか

而も俺は貴様の顔に見おぼえがあるのだ

それどころか、俺は確かに  
 貴様と血をわけあったことさへあるのだ  
 幽霊！  
 それとも貴様は此の俺こそ（全くだ！）  
 貴様の行手を塞ぐ幽霊だとでも云ふのか  
 若しもそれが本当なら  
 （あゝ、どんなに苛立たしいことだらう  
 どんなに淋しいことだらう）  
 俺は貴様を呪ってやる  
 それどころか、序に俺自身をも呪ってやる  
 人生を淋しいと云ふやつがあるなら出て来い  
 俺はそいつの骨から肉を引裂いて  
〔獄〕  
 地獄の池の底に投げてやる  
 葱一本投げてやりはしないぞ  
 そこに血が流れるなら  
 犬でも  
〔獄〕  
 地獄の一番つまらない番人でもかまはない  
 若しもそれでお前達の腹がこえるものなら  
 ひとたらしも残さず嘗めて了ふがいい  
〔獄〕  
 あゝ、だが犬でも地獄の番人でもかまはない  
 あゝ、何うか此の俺にそっと耳うちしてくれ  
 彼奴と俺と  
 どっちが幽霊なのか  
 それとも彼奴と俺との間を  
 ほんの偶然が通り過ぎただけなのか

[×を附す]

## 十二日

学校のかへり、小石川に廻って、叔母様から五拾円戴いて来る。これで私も安心して仕事を続けることが出来る。

## 十三日 sunday

朝のうちに風呂屋に行って来る。知らない風呂屋に行くのは、決していい気持ではない。途で多摩ちゃんに逢ふ。昼食をすませて出かけようとする処へ、お玉様が尋ねて来る。三時半に小城サンに行く。良サンが来て居る筈だったが、少し遅かった為に会はない

いで了ふ。夕食をすませた処へ、兄がひょっこりやって来る。小城サンでは多勢の人達が、  
殊更に莫然として雑然として居たし、惣ちゃんは一人でふさぎ込んで居るので、自分まで極度に不愉快にならうとする。で八時には暇して、遠山サンに行く。遠サンのすぐの兄さんが来て居て、珍らしく酒を出される。十時まで話して彫刻をもって帰る。家では皆寝て居る。兄も帰って来ては居ない。

私は随分心して、用心深く喜びの種ばかりを拾って居る心算なのだが、何時の間にか私の園には、醜い悲みの花が開いて居る。其の上驚くことには、そんな場合の方が多いのが、殆ど普通になって居ることである。私はそれを私の過ちだとは、何うしても信ずることが出来ない。私は確かにそれを、私に常に反抗するもの、幽靈の仕業に違ひないと思ふ。

#### 十四日

私が心よく待ちうけて居た仕事が、其の最初に於て、こんな風に挫かれようとは。モデルは私を二時半まで待たせて、とうへやって来ては呉れない。私は怒りと悲しみとで荒さんだ心で、めいり込んだ思ひで、日暮前に家に帰つて来る。あゝ、何うか明日からこんなことが無くてくれるように。

私はさつき通子サンと澄子サンに宛てゝ、と云ふよりは、あの人達に解つても解らなくておおかみなしに、手紙の形式の上に、何処にもやり処のない私の不満をぶちまいてやつた。そして其の為に、私の心が軽くなつた。で私は機を逃さず、先達ほんのはじめの数行を読みかけて、読みしぶつてしまつた「ダマスクスヘ」を、一息に読み終へた。(第一部)。それは私の或る考へを力強く裏書してくれた。私の考へによると、真理は一つの多面体である。それはどんな処からも、ほんのその一面しか見得ない処の、而も無限な多面体である。それは、幾何学的な多面体ではなくて、形而上学的な多面体である故に、上記の矛盾は至極容易に考へ得られるのである。そして恐らくは、ストリンドベルヒの真理も、亦例へばそんなものではあるまいか。何故なら、長い長いダマスクスヘの道は、決して「新らしい歌」の内容を暗示するようなものではなくて、其の途上の到る処へ煌々と目を射るものこそ、作者がそこにまきちらばめていた真理の片々なのである。勿論、此の長い長い旅は、一つの大きなものを暗示して居る。併それは成し得る範囲内の、而も暗示に止まるべきものである。即ちこれは、全多面体の輪画とその存在を暗示するものであつて、つまりは私達の一目に見得ない処の無限である。そして、此の全多面体の存在を認め得た人々にこそ、此の途上にちりばめられた真理の片々が、いや増しに輝きをますのである。

#### 十五日

私が昨日、通子サンと澄子サンに当てゝ何んな手紙を書いたか、私はそこに一昨日

の幽霊の話とし、それから偶然にも昨年の昨日の、「自分に反抗するもの」の話しを書いて送ったのである。(而もそれは弟と二人、東京堂で地震にあったことから書き出されてゐる。) そして今日である。今日、私達は早朝に、私は心のみ醒めて、まだ目を〔ママ〕ねぶつたまゝであった。私達は六時少し前に、どえらい地震に驚かされたのである。兎も角も、笑って話しながら朝食をすませて、私は弟と家を出た。然し中野の駅で聞いて見ても、電車は何時通るようになるのか、全く見込みが立たなかった。で私達はそのまゝ上原サンに行ってお茶をにごして居る。十時過ぎに電車が通ったので、行ける処まで行く氣で電車にのる。けれども大久保まで行った時、上野方面に行く者等は下車するよう注意される。新大久保までしか電車が通らないのである。で新大久保まで歩いてプラットフォームで待つと、上りがやってくる。そして其の電車はそのまゝ始めて新宿に入ることになる。で新宿からの電車のひどくこみ合ふことを恐れて、私は其の電車で新宿に引返す。新宿には、上野行きの電車が少しばかりの乗客を乗せて待って居る。私もすぐに飛びうつりはしたけれども、いつ動くともない。やがてして、皆降りるように注意されて降りる。何のわけだかは解らない。プラットフォームは寒く、何うしたものか、少しばかりの人々が居るばかりである。けれどもぢきに、黒山のような人々が一時に階段を降りて来て、忽ちにプラットフォームを埋める。そして何のことだ。私達は結局同じ電車に乗せられて、遅く遅く上野に運ばれてゆく。学校についたのが、十二時前である。午後一時半に浜野病院に種痘をしてもらひにゆく。

二時開診とのことで学校に帰ると、モデルが来て居る。有難い。そして二時に再び病院に行く。けれども、医者は三十分の余も私を待たせる。私はぶん～怒って学校に帰る。三時になってしまふ。又々仕事に逃げられる。だが有難い。明日こそ十全に事が運び出すだらう。ひどい風が荒れる。空気は乾ききって、ちくちくと咽を刺す。そして、私はどうも風邪をひいたに違ひない。

通子様

澄子様

昨日の長い長い手紙を御覧下さったことと思ひます。そして何うです。今朝の地震です。これでも私は「私に反抗するもの」の存在を感じてはならないでせうか。それでも、十二時には学校に行って居ました。有難いことにモデルは来てくれました。ひどい風が荒れます。空気は乾ききって、ちくちくと咽を刺します。そして、私は何うも風邪をひいたに違ひありません。

お兄様と惣ちゃんとが来て下さったのに、私は学校から遅くなつて帰りました為、お目にかかりませんでした。何卒よろしくお伝へ下さい。大変に残念でしたと。

(功)

### 十六日

昨一夜の烈風は、もう長いこと乾ききった空気から、最後の塵のような水氣をまで吹きとばして了ふ。そして私も、もうすっかり咽喉をいためられてしまふ。咳とくしゃみが少しも自分を休ませてくれない。もう私は煙草を吸ふことも出来ない。

学校から顛えて帰つて来ると、文ちゃんが来て居る。頭が重い。熱くほてつた泪が、目の心を压へつける。

### 十七日

早く起きるとから、空一面にどんよりと暗い雲が被ふて寒い。私達は、何日ぶりで雪を見ることだらう。私はそんなことを考へながら、十一時半に学校に出てゆく。アトリエは暗くて、仕事には似合はない。けれども、四時まで仕事をして外へ出ると、何うしたことだ。薄い西陽がさしかけて、空は浅縞色に透いて居る。私は雨も雪も要らない。けれども、ほんの少しでもいいから、私達の咽を潤ほしてくれるような水分がほしい。もう空気は、一粒の水滴だってもち合はせて居ない。こんな日が永く続くならば、私達は乾上つてしまふに違ひない。

### 十八日

何故か。私が今日こそと思ふ日に、私のアトリエに、ストーヴのまはりに人が来る、人が喋る。そして私はほんの一時間程、自分をはげまして、やっと仕事をすることが出来る。何故か。私は少しばかり頭の調子がおかしいかも知れない。私は二円二十五銭の買物に二円六十五銭を払つて、親切な番頭から四十銭をもどされる。次に私が五銭のボタンを五つ取つて十銭出したら、大道商人が露骨な侮蔑を私に投げる。私は直ぐに一円五十銭手の平にのせて出したら、今度は商人の目が異常な愕きに円く光る。私はもう堪らなくなつてどなる。「一体いくらほしいんだ！」商人はするさうな目に晒ひをふくめて、「ぢゃ、五十銭戴いて置きませう」だと。

何故か。家では赤ン坊が火のつくように泣いて泣いて泣いて、さて死んだように寝入つて了ふ。

だが私は、家にかへつてから曜日表を作つて見る。すると三月の二日で丁度六週間になる。私は希望に燃える。其の上、私は今日本の中で二つの言葉を見つけ出す。「歓びと悩」と。これは確かに天啓である。それは此の学期のはじめに、私が断然教師に反対して仕事をとりかかった、而して今それを完成させようとして居る処の夢である。即ちそれは、三月に生れ出ようとする私の二人の娘達が分けようとして居る名を指して居る。「悦びと悩みと」――

十九日

ダマスクスへの二部及び三部を読み終へる。けれども此の種の本には、読み終へたと云ふ言葉が、全然意味のないことであることは勿論である。けれども、兎も角も読み終へたのである。第一部の事件が、線を以て画かれて居るのに対して、第二、第三、殊に第二部に於ては事件と云ふよりも、内容がマスを以て盛り出され、而も極めて複雜したzigzagのまゝに仕上げられて居るので、明快が妨げられる。とは云へ、これは極めて必然的であるかも知れない。と云ふのは、作者自身が徹底を抛擲して居るから。若しもそこに作者の徹底があるならば、それは有所徹底を否定したと云ふ徹底である。第三部の最終の幕々に於ける淨罪に至っては、私には解らない。勿論その基調となって居る處の大肯定は、〔漠〕莫然と大きな力を以てせまつて来るとは云へ、其上私はそこに数多の偶意を読まねばならなかつたかも知れないのに、私はあまりに、そこに引用された諸事実に対して無智である故に、それらは全く封ぜられたものようである。で結局私は、「白衣の母親」にとりのこされて了つた「よその人」のように、ダマスクスを遂に見失つたまゝで取り残されたのである。だが私は、不用意にダマスクスにのり込んでしまつて、後にその夢に気付くようになるよりは、この方がいいように思ふ。私は全く何の用意もないし、まだ～～若すぎるから、而して自身でたどりつき、飛びこんだダマスクスでなければ、ダマスクスはダマスクスではなくなつて了ふのだから。而して作者も亦それを知つて居て、そのように親切に私達を導いてくれたようである。

仕事場はまだ～～落つかない。三時には真黒な煙突掃除人達が五六人どや～と入つて来て、私達を追ひ立てる。私は仕事にかかるて、此の一週間のようなひどい目に会つたことがない。帰りに建畠先生の家へ行く。

二十日 sunday

夜を一夜、赤ん坊が泣き続けて決して寝つかない。けれども、自分も亦極度に労れて居るので、その泣声を堪らなく気にしながらも、いつの間にか寝て居た。勿論、直きに再び醒めると、相変らず赤ん坊は泣き続けた。而して自分はいつになく、八時になつてやっと起きる。妹は赤ん坊が泣くと云つて、台所の用をしながらそ～～涕いて居る。母は娘がめそ～～泣くと云つて、ぶん～～怒つて居る。そして自分は、故知らぬ苛々しさを、苦虫をかみしめたような顔の下に隠して居る。スキートホーム！もっと泣け、もっと涕け、もっと怒れ。それで皆々の心が幾分でも慰められるならば。そして其の後に静けさが、平和が待つて居るかも知れやしないのだ。

午後、番町の焼跡に行って、只一つ完全に残った小さな彫刻をもって帰る。荒川さんにも寄つてみる。

## 二十一日

〔欄外に記す〕  
〔(若人への謎)〕

ちらと見た夢は  
何んなに悲しいことだらう  
ちらと見た夢は  
何んなに懐かしいことだらう  
人の心に  
おゝ、瞬間を永遠にまできざんで〔綴つて〕ゆく

過ぎゆくものは  
何と悲しいことだらう  
過ぎゆくものは  
何と懐かしいことだらう  
人の心に  
だが、静かな思出を残してゆく

〔×を附す〕

---

私の浪漫主義を見て下さい  
私の感傷主義を見て下さい  
私は強烈な現実に溺れるよりは  
(あゝ、それだとて先は見えて居ます)  
優しい千の思出を残し度いのです

---

## 二十九日

〔小城道子〕  
ミッティーさん  
〔小城澄子〕  
スムミーさん

千九百三十四年一月二十四日

お返事のお持ちあはせがなかったと見えますね。私はあの狂気ぢみた手紙を、お二人が眞面目くさって「わからない。何にもわからない」などと考へて、首をひねつて読ま

れた姿を思ひ浮べて頬笑んで居ます。何故なら、私はあの中に、何にも意味をふくめないで置きましたから。あなたがたはあの中から、只ほんの少しばかり面白いとか、又はまるでつまらないことを書いてよこしたものだと、感じて下さればよかったです。《二十九日記す。二十四日の朝でした。ここまで書いた所に鎌倉から電報が来たので、吃驚して方々飛び歩いて、夕方鎌倉に行ったのでした。で、昨夕ぐったり労れて帰って、早く寝てしまったのです。お宅では、お母様が急にお悪かったさうですが、如何でいらっしゃいますか。惣ちゃんから大分およろしいように伺ひましたが、猶お大事になさいますように、あなたがたがよく気をつけて上げて下さるように、お願ひ申上げます。》そこで前の続きですが、あなたがたは、あの中から事実や事件よりも、気分だけをくみ取って下されば、私の意は果たされるのです。例へば何かの原因で、或は体の具合が優れなかつた為に、或は運命があまりに意表外に発展したりする為に、或はまた、全然自分にも解らない、けれども堪えられない圧迫を莫然と感じて独り苛々して居たと考へます。そこで私は、地震の不快と發熱の因と、又総べての「自分に反抗するもの」とを、その圧迫の主なる一つの「幽靈」と感ずることも、稀には有り得ようと思ふのです。処でそれを「幽靈」と感じ、「自分に反抗する敵」と感ずる心は、率直を欠いて居るかもしれません。それにしても、あれを書いた私は、少くとも私自身に対しては、至極率直だったのです。

ところで、スムミーさん。今朝お手紙を拝見して嬉しく思ひました。（あなたは私の偶意が解らない、わからないと云はれるそばから、あなたは豊富な偶意をこめた手紙を下さいましたね!!）あなたがあなた自身の内に醜さを認めれば認める程、あなたは止み難い心で美に、美しいものに憧れて居ます。率直な心を、私はそのまま、美しく思ひます。

心配しないでいらっしゃい。「スムミーはいい子ですよ」。けれども「スムミーは勇気がなささうですよ」「父さんはぢれったいのですよ」「だけどおこりはしませんよ」「スムミーはかはいさうなんですよ」

圓かなるものは親しき

そは望みなればなり

刺あるものは更に親しき

そは自らはいとしければなり

ところで今日は、だん～しちっかたくなってゆくばかりですから、もう止めます。退屈なさったかも知れませんね。お兄様に御都合のいい時、学校の方にも遊びに来て下さいに申上げて下さい。お茶位なら御馳走しますってね。

〔欄外に記す〕  
〔祖父急死〕

（久功）

——二十四日の朝だった。鎌倉から電報が来て、祖父の死を知らせる。私達はキトクの報に接しないので、祖父が脳溢血で皆の知らない間に死んでしまったことを知る。而し

てその通り、祖父は二十三日の夜、機嫌よく床についたまゝ、夜中のうちに亡くなつて居たのである。私は電報をうつたり、親類を廻ったりして、夕方鎌倉にゆく。それから二十五、二十六、二十七日と御通夜やらこまへした用事やらで、忙しく過ぎる。そして二十八日午後一時から、青山斎場で葬儀が行はれる。青山の通りには、水兵が三町も並んで「捧げ銃」で靈柩を迎へて呉れる。柩車の両側には、六人の海軍大将が陪柩者として、金ピカの服で静々と歩いてゆく。斎場は某元帥をはじめ、数百の海軍高官を以て埋られるように、斎壇は宮家をはじめ鎮守府長官、艦隊司令からの沢山の紳と花環とで飾られる。式の間々に海軍軍樂隊の奏楽が響き、華やかな樂調を破って、数十の吊銃が鳴り渡る。私は祖父が、こんなにもことごとしくされるような偉い人だと云ふことを、今まで知らなかつた。けれども私は、何故かおちつかなかつた。私は父の葬式を思ひ出す。それは九月の半ばで、静かな風に山ならしの葉がはら～と落る頃だった。ほんの五六台の人力車が、稲の穂の漸く重たげな田畠道をうね～とうねって行った。それが葬列の総べてだった。けれどもその時、私の心はしめやかに、亡くなった父のことを思ひつゝけて、他意がなかつた。私は遠く思ひ返して、その静かな心と、そんな心で送つたささやかな葬列とを懐かしく思ふ。

[欄外に記す]  
[二十五日の夜、雪が降つて積む　葬]

### 三十日

くだらない日が続く。

### 三十一日

静かな思索を乱すものは  
赤ん坊の泣声である

安らかな眠りを醒ますものは  
赤ん坊の泣声である

余儀ない仕事をさへ阻むものは  
赤ん坊の泣声である

あゝ、夜も昼も  
絶対の権威を以て、魅惑を以て迫るものは  
赤ん坊の泣声である

二月一日

〔小城澄子〕

スムミーさん

一九二四.二.一

いいことを教へて上げませう。あなたは雑記帖を一冊先づ求めるのです。そして毎日毎時、あなたの心の影をそれに記して御覧なさい。そこにあなたは、朝六時に起きてお掃除をして、御飯をたべて学校に行って……などと書かないで、例へば、私に下さった御手紙に書かれたようなことをでも、歌をでも、詩をでも、又は涙をでも書き綴って御覧なさい。<sup>(し脱カ)</sup>歌や詩は慣れないうちは、その為の努力に飽きたり、まとまらなかつたりますから、御手紙の形式が一番いいように思ひます。すると、相手がまたあなた自身なのですから、恥かしくもなく、また淋しくもならないでせう。昔ギリシャにサッフォと云ふ女の叙情詩人が居ました。その人の小さな詩に次のようなのがあります。

親しい人々よ、あなた方には  
私のこの想ひは  
お話しすることが出来ませんけれども  
けれども私の心の中で  
私はそれをよく知つて居るのです

ね、人は皆そんな想ひを持って居ます。誰かに話しうくて話しうくて仕方がありません。話さずには居られません。けれども、話すことが出来ません。何故でせう。話せば夢が、宝が消えて了ふからです。あなたが恐れていらっしゃるように、淋しくなって了ふからです。

それから、こんなお伽噺があります。昔アルカディアの野で、アポロとパンとが音楽の競技をやりました。で、その審判官に選ばれたのがミダスと云ふ王様でした。ミダス王様は、アポロから沢山のわいろを貰つたので、直ぐにアポロの方が遙かに勝れて居ると云ひました。するとパンが大変に怒って、ミダス王様の頭に驢の耳をつけてしまひました。ミダス王様は家来達の前にそんなものを見られては大変と、それから後は深く頭布を被つて了つて、誰れにも気づかれないようにして居ました。で、何うかして耳を元の通りにして貰ひ度いと思ひつゝけて居たら、いつの間にか木の株に腰を下したまゝ、うと～と眠つてしまひました。そして、夢の中でアポロとパンの競技をやりなほして、今度はパンに勝たせて、耳を元の通りにして貰ひました。そして、有頂天になって、夢とも知らずに頭布をとつて踊り狂つて居ました。そこへお附の女達が三人して王様をさがしに来ました。見ると王様の耳には、もじゃ～と毛がはえた大きな驢の耳がついて居ます。女達は驚いて騒ぎたてます。王様は気がついて、大変なことになったと思ひ、女達に決して誰れにも云はないように誓ひをたてさせました。女達はその有様を見てしまつたものですから、その上王様から固くとめられてしまったものですから、さあ、云

ひ度くて云ひ度くて仕方がありません。けれども、若しも云へば、命ととりかへっこをするようなものですから、思ひきって云ふことも出来ません。そこで、三人して相談して、誰れも居ない所へ行って、大きな古い樹の所に行って、まるで人間に話してきかせるよう、自分達の見たことをすっかり話して了ひました。そしたら、女達は胸がせい／＼して、もう其の上云ひ度いとも思はないようになりました。

ね、云はなければ腹がふくれるし、云へば淋しくなったり、命がなくなったりするのです。ですから、誰も聞かない処で心ゆくまで話したり、或は紙に書いて自分で自分に云って聞かせたりすることが、何うしても必要になって来ます。兎も角も、やって御覧なさい。慰められますよ。私の日記も、一つにはそんな動機から始めたのですが、今ではほんとにいいことをおぼえたと思って居ます。

私は何故こんなことを長々しく書いたでせう。実を云ふと、私はあなたの御手紙に対して、何と御答へしていいか解らなかったからです。私はあなたから思ふと、大分年をとって居ます。で私は、今私の居る所がどんな所だかを御知らせしませう。昨年の十月の所にこんな詩が書いてあります。

兵隊よ　兵隊よ  
殊には君等から嘆々と鳴り出づる喇叭は  
まだがんぜない私に  
誇らかに勇ましい最初の夢を投げてくれた

だがやがて遠い兵營の喇叭が  
何事もなく静かだった私に  
故しらず春の夕を悲しく思はせたように  
単純だった心に小さな疑惑を置いたように

今ではただ、ほんの少しばかり  
無意味な雑駁な調べを以て  
全くほんの少しばかり私に考へさせる  
兵隊だ、兵隊の喇叭だな、と

ね、丁度あなたは今、第二句のような何んな小さな響きにも応へるような、極めてふれ易い、感じ易い心の状態に居るのではないでせうか。そして私は、第三句のような、至って乾燥無味な無感覺な所にまで来てしまったのです。何事も、「時」の支配から逃がれることは出来ません。同時に私は、今の私の所が前の所よりも少しでもいいとも考へられません。で、私はこれだけは云へると思ひます。

「あなたが泣き度い時にはもっと～お泣きなさい。あなたが涙の海に泳ぐ姿を人が狂者と見ようとも、少しもかまひません。それであなたが少しでも慰められるならば、心ゆくまでおなきなさい。そして自分の姿をふりかへって、おかしかったならば、思ひきってお笑ひなさい。」

ポンポンが悪いのですって。

早く直さなくてはいけません。

(久功)

## 二日

雪が二寸程も積んで居る。雪は尚もふり続ける。

祖父の十日祭に当るので、学校を休んで、雪の中を十時半に青山の墓地にゆく。墓前祭をすませて、鎌倉にゆく。午後二時から御祭。宿る。

## 三日　sunday

昨夜はひどく風が吹き荒れたので、昨日の雪はすっかり消えてしまった上に、あたりは殆ど乾いて居る。

## 四日

朝九時十一分で帰京。真直に学校に行く。汽車の中で、電車の中で、ショウの「悪魔の弟子」を読む。このアナテマは大分浪漫主義で飾られては居るけれども、また一流の鋭さをも随處に見せて居る。殊に第二幕の浪漫主義は、私を引寄せた。事件が、会話が、頗る巧みに扱はれて居る。ストリンドベルクのもののように、息づまるようなことがない。それは、対社会的な挑戦であって、傍観的な冷やかさがあり、悠々たる余裕を以てこの社会の産んだ人性を晒って居るからである。〔俗〕

何日待ったことだらう。くだらない、何ともない死んだような日が、もう一ヶ月の余も続く。何でもいいのだのに。病気でも、憎しみでも。おゝ、嵐がいい、嵐が。こんな退屈な日本間と寒さとが、永く続かれてたまるものか。ちらっと雪が降って来ても、二寸も積まないで消えてしまふ。そして平凡な太陽が、毎日出て来ては引込んでゆくばかりか、これぢゃ俺の生活もおしまひだ。死んで居る方がまだました。天井裏でちたばた騒いで居る鼠ども。貴様等でも死んで腐って、座敷の真中におっこちて見ろ。それでも何ともないよりは、愛嬌があると云ふものだ。

## 五日

全く退屈しきって居る時には、十本六銭の安煙草がどんなに私を慰めてくれることだらう。だが煙草は決してうまくない。それはまづい。それは僅かに残って居る咽のねば

りをすっかり吸ひとて了ひ、かさかさな煙のラッシで咽の中を、氣管をひっかきまはし、ひりひりと痛むまでに爛らせてしまふ。けれども退屈と云ふやつは、もっと～強い。益々強い。それ故、私は全く無意味に、全く無趣味に、ぶか～と煙草を吸ひ続けては、何百と云ふ輪をふいたことだらう。なろうことなら、私は乞食になり度いものだ。ふん、「わたしは自分の計画したことは、万事首尾よく成功した。なぜといふに、わたしは何も計画したことがなかったからな……。私は人生から得ようと思ったすべてのを得たのだが、知って居るかね。ただわたしは、それを得ようとしたことがなかった」だとよ。

## 六日

### [保様

一七七七年、ある真闇な夜から雪の朝へかけての、一番厭な時刻にニュウ・ハンプシーヤのダッジョン夫人は、ウェブスター<sup>まち</sup>ブリッヂ<sup>断片に記す</sup>都會はづれにある百姓家の台所兼居間で起きて居る。彼女は愛嬌のある女ではない。どんな女にしても、夜中起きて居た後で、一番よく見えると云ふことはないものだが、ダッジョン夫人の顔は、一番いい時でも恐ろしい程に溝が掘ってあって、その溝の中に死んだ清教主義の空虚な形式習慣で以て、一種の酷たらしい気質や烈しい驕れる心を隠すことが出来るのである……（一寸待って下さい。私は退屈<sup>247]</sup>】

[家の生

だからだ

な次第

を説

のでは

その貴き

女に同

ゐる

を慰める

以上悪】

私は昇降口の固い硝子戸に凭れかかって居た  
太陽はもうとうに落ちきって  
あたりには重い薄闇が残って居た  
電車は高い芝手の下を走った  
芝手の麓に斑らな雪がちら～と残って居た  
芝手は何処までも続いた

ふと土手が切れて  
 今度は黒い畑が  
 何も植はってない冬の畑が続いた  
 夜が来る  
 あたりがあまりに早く真暗になってゆく  
 遠い近いあかりが来たり過ぎたりした  
 突然電車ががたんと止まった  
 あたりがぱっと明るんだ  
 私はぞろ～と人込みの中を押されて  
 小さな田舎駅の外に押し出された  
 それから白い道が続いた  
 白い堅い道が遠く遠く続いた  
 冷たい靄の中に闇の中に  
 裸足がぞっと寒い  
 まるで無感覚な足先はただじん～して居た  
 けれども私の生々したも一つの感覚は  
 オイル・ストーブの温もりをぼうっと味はった  
 熱い紅茶から立つ湯気を聞いた  
 室咲きの薔薇の幽かな香りを見た  
 女友達の小さな手と元気さうな頬が匂った  
 あゝ、私！  
 微かな風のむかうに明るい星が光った  
 左脇に抱へこんだ五つの重いティンド・ミルク——カーネイションブランド  
 右の手はオーバーのポケットの底に  
 レモン・エッセンスの冷たい小瓶をにぎりしめて居た

[×を附す]  
 [欄外に記す]  
 [冬暮幻惑]

### 七日

モデルは、昨日と今日とを休ませてくれと云つて居る。朝からどんよりと、一日曇つて居る。八時半に風呂屋にゆき、九時半には家を出る。十時過ぎには、江波の処に居たが、十二時には江波と本郷通を通つて木山を訪ねる。〔知彩〕  
〔豊四郎〕二時には学校にゆき、本郷に廻つて青木座で一休みして、六時には家に帰つてくる。

私は此の冬が始まって以来  
丁度三ヶ月といふもの  
生きたものとては虫けら一匹見やしない  
それは私は稀には空に木に鳥が飛ぶのを見た  
けれども奴等は  
生きて唱って居るといふよりは  
死にかけて呻いて居ると云つた方が本当のようだ  
生きて飛んで居るといふよりは  
吹く風によろめいて居るといった方がましな位ひだ  
それから私はそこここにうろ～する犬と猫とを見た  
けれども奴等だって  
宙に舞った風船玉か  
墓場の隅に立つ幽靈よりも  
ほんの少し立派な足どりだとは云へやしない  
それから私は毎日毎日  
何百と云ふ車につながれた馬と牛とを見る  
けれども彼奴等ときたら  
工場の機械よりも、固いお役人よりも  
少しでも意志らしい意志を持ってゐるとは思へない  
それから私は満員電車の中に  
沢山のお仲間の顔を見る  
おゝ～、髑髏のように堆い顔、顔  
しなびた顔、青い顔  
新聞に雑誌に  
死んだ眼を落として居る顔  
労れた顔、歪んだ顔  
一つの顔がつぶやく「金 金 金……」  
一つの顔がかこつ「金 金 金……」  
一つの顔がといきする「金 金 金……」  
次の顔が泣き出す「金 金 金……」  
で、総べてだ、お終ひだ  
おゝ、何処にかたった一つ残っては居ないのか  
笑ってる顔、怒ってる顔  
夢みる顔、苦しむ顔  
おゝ、悦んで居る顔よ

闘かって居る顔よ  
力にあふれた顔よ！  
私は全くまる三ヶ月の間  
生きたものとては虫けら一匹見やしない

---

## 八日

闇に咲いた花である  
誰も誰も彼を見たものすらない  
花自身も只一度  
われを省みたことがない  
けれども闇をゆく一匹の犬と一匹の猫とが  
その花の前に  
幾度ひそやかな口づけを投げたか——  
誰も知らない  
花も知らない

深山の岩間に生れた宝玉である  
無言の天と地の外には  
誰も誰もはなしかけようときへしない  
けれども、たった一人の山男が  
あまりに輝かしい光の前に  
おびえ、涙して  
ひざまづき、らいはいしたことを——  
誰も知らない  
無言の天と地が無言のまゝにちらと見たばかりである

[×を附す]

四日前に望んだ嵐は、とう〜やって来たよ。朝から騒がし、日が明けると、外は大変な風で、南風で、隙間風でさへぬる〜と生温く湿って居た。風の中に糠のような小粒な雨がまじって、砂のように硝子戸にはねっかへった。けれども遅過ぎた。嵐さへ自分には、別段たいしたものではなくて居た。それも、昼には雨も止んでしまったし、風も取り残されたような奴だけが、のろ〜して居る位だった。学校に久々で三角が尋

ねて來たので、二人で銀座に出かける。キリン、プランタン、パーラー、資生堂、そして本郷の燕楽軒、そして三角を江波の処に寝かして、十二時過ぎに家に帰る。日暮前には、また～風がやって來た。思ふさま埃を卷いて。けれども自分達はカフェーからカフェーで暖まって居たし、昔知つて居た女達（全く永い間こんな処に来なかつた）の中の一人二人が残つて居るのを見て、残忍な氣分になつて居たので、風などは十八米あらうが二十二米あらうが、かまつことぢやなかつた。

### 九日

今日、胸像を仕上げて、石膏屋に渡す。

### 十日 sunday

終日、霧のような雨が降つて止まない。風が時たまにびゅう～と吹きまくるけれども、自分は終日机の前に腰かけたまゝ、何もしな。全く今日位何にもしない日は、此の頃にも珍らしい。本をひっくりかへしては見ても、三十頁とは読まない。原稿紙をひっぱり出しては見ても、ペンを取つてはみても、字を一字書いたのではない。弟と花ふだを引いても、はじめからしまひまで負け通す。で早く寝る。

### 十一日

紀元節。どっちかと云へば、極めてしみつたれた日である。終日太陽は影さへ見せず、灰色に湿っぽく曇つて居る。雨さへ時たまにちら～と落ちて來た。で、極めて静かではあるけれども、静かと云ふことは、そんなにショッちういいことではない。其の上何処も此処も、道は十二ヶ月のおしるこのよう、足下ばかり気にして歩く人々は、誰れもかれも青白い、或は染色の顔をしかめて居るのである。で、今日の静けさは、まあ云はば、そんなところから來て居るのだと云つてもいい。で十時には家を出て、笹塚に行く。〔山口〕昇さんの処に後藤が来て居て、其処で昼飯を食べて居る処に、中井の良サンがやって来る。牛屋サンで晩飯兼帶のおすしとビールを飲んでも、晩には水村へ行って、皆でトランプをして遊んでも、帰つて来て見たら、文ちゃんが遊びに來て居ても、それにした処で、今日はしみつたれた日であると思はれる。何故か？

そんな馬鹿なことが云へるものぢやない。

### 十二日

曇。道が悪い。氣色が悪い。間が悪い。学校には朝から出かけても、電報を受取つたばかりである。で、モデルは來ない。午後から自分の顔をはじめけれども、こんなやな目に何が出来ると思ふか。何にも出来やしない。湿っぽい心で暗くなつて家に帰つて來ると、〔柴山〕昌生叔父様と〔本田〕譲二叔父様が來て居る。なきない話がはなされる。昌生叔父

様は、八時半には鎌倉に帰ってゆかれる。譲二叔父様は、十一時過ぎまで駄弁ってゆく。で、つまりは、今日も亦何にも得なかった訳である。何故か？そんな馬鹿なことが云へるものか。

### 十三日

馬鹿なのだ！何が、誰が、馬鹿なのか？そんなことは問題ではない。馬鹿なのだ！夜明方、目が覚めるとから、時計が自分を欺く。金槌が手を欺く。停車場では、電車が人を欺く。学校ではモデルが時刻を欺く。烈風が、煙突からもぐり込むので、火が下にむいて燃える。くだらない冗談が真面目な結果を欺く。日暮に帰り、冷たい風が氷のかけらのようにまともに顔に吹きつける。だがその冷たい風が終日かかる、漸く重たい雲を追ひやってくれる。それにした処で、家にかへって見ても又々何にもしない。

〔欄外に記す〕  
【冬さむ】

私が一人でふん～怒って  
吹きさらしの冬の道を歩いて居ると  
氷のかけらのような冷たい風が  
凸凹のまゝにこつこつと固くなった道が  
まづいまづい安煙草が  
一緒にになって私の耳もとにつぶやき出す  
「まあ～お前さんのにがり顔ったら  
だがわしらだって少しぐらみ  
出来る時に勝手をさせて貰はくちやね  
それもうしばらくさ  
夏にでもなれば日の光は強過ぎるし  
色々な邪魔ものが  
次から次へと出てくるわけさ  
まあ云はば上には上有あるのさ  
だからお前さんだってせっせと働いて  
暖かい毛の外套でも一枚買ふのだ……  
おや～お前さんもそんなふうに  
慰めを聞いて青くなつて怒るようぢや  
お前さんは（可哀いさうに）  
暖い夢さへも持ちあはぢやないと見えるね」  
ところで私は全く

青くなつてぶん～怒るのだが  
そんなものかな  
「まあ云はば上には上があるのさ」

[×を附す]

十四日  
めくらの風なら仕方もあるまい  
あっちの土手にぶつかり  
ここの屋根からころげ落ち  
此の野郎  
又俺の帽子を飛ばしやがる

幽霊風なら仕方もあるまい  
どんな顔してどこにゆくのだ  
俺は詩人だ——見つけたぞ  
つかまへたと思ったが  
えゝ，何でもねえ

めくらの風なら  
幽霊風なら  
街を野を  
ぶつかりぶつかり何処までも  
えゝ，気楽な野郎だ！

[×を附す]

十五日  
やうやく天気がよくなつて，昼間のうちはぽか～と暖かい

十六日  
今日一日，俺は感傷主義者になったようだ。

十七日　sunday  
音楽学校のホールに多久寅<sup>248)</sup>氏のコンサートを聞きにゆく。晩は中井，野崎，後藤のグループが昇サンの処に集る。自分は水村に宿る。昇サン夫婦がフランスへ立つので。

十八日

私はのぞき見の名人です  
 人生の悲しい道化  
 私は極めて気取った風で  
 おじぎと一緒に一寸帽子を取って  
 彼女に挨拶の瞳を投げかけます  
 にっと笑って見せるか  
 或は愛嬌をこめて「今日は……」

おゝおゝ、彼女の可愛いこと  
 小鳥かばったののように跳ね廻って居た彼女が  
 おや～あんなに真面目くさって  
 極めて上品に、一寸腰をかがめて  
 私に挨拶の心を返しますよ  
 にっと笑って見せたり  
 或は慎ましい口の中で、「今日は……」

で、私はいつもそんな風で  
 どんなに食べたいものがあっても  
 私は遠くからちらっとのぞき見して  
 極めて上品な  
 空気のような味を味はふのです  
 (のぞき見は上品なものですね  
 夢のようで、思出のようで  
 云はば人生の極めて気取った影絵です)

私はのぞき見の名人です  
 人生の悲しい道化  
 私は恋の窓から彼女をちらっとのぞき見します  
 私は運命の穴から人生を一寸のぞいて見ます  
 希望の中からは未来を、又美しい死を  
 詩のあかりとりからは  
 夜の空の星の中の運命の怪異を  
 怪しい錬金術師の打出す科学を  
 巨大な魔法使の掌上にぐらつく文明を

永い永い「時」が種をかへ品をかへ繰返して居る  
決して大詰のない道化芝居をも  
私は極めてしゃれたタキシードの目でのぞき見します

私はのぞき見の名人です  
人生の悲しい道化  
だが、だが、だが……  
それ故に  
私は自然の、人生の  
どんな小さな一かけらでも  
あゝ、決して此の手に確りと握りしめたことがない！

[×を附す]

#### 十九日

閑かな日が昼になって暗くかげてしまふ。  
今日、上野の山で、岡村の小叔様と愛ちゃんに逢ふ。  
夕方、上野から歩いて花輪を持って田辺サンにゆく。十一時に頃る頃には、厭らしい  
生温い雨が降って居る。

#### 二十日

雨も止んで、日が照って暖かい。

#### 二十一日

暖かい。而して街は埃で真白である。昼後直ぐに田辺サンまでゆき、華族会館まで行  
って来る。

#### 二十二日

曇、小雨。祖父の三十日なので、五十日祭を行ふ。一時、青山、墓前祭。三時、華族  
会館にて御茶。

急に真冬がかへる。どえらく寒い。頭が一日くら～する。不愉快。

#### 二十三日

曇、寒い。音楽学校の音楽会にゆく。管弦楽も弦楽もねむったくダルである。信時氏  
の奉祝歌混声合唱が只一つ美しい。そして夜。夜は冷たい北風がぞんざいな建物をがた  
～と搖って吹く。室を開きごう～と鳴いて吹く。

## 二十四日 sunday

体中がぞく～するので、熱をとて見る。八度一分ある。で、うららかないい日ではあったが、朝からおとなしく床につく。体がだるいので、寝たり醒めたりする。昼には八度八分にまで上る。そろ～腰が痛くなつて来る。骨々がぎごちなくなつてくる。

[欄外に記す]  
[24. 午前 9—38.1

正 午—38.8

午後 6—38.2

25. 午前 2—38.2

午前 7—37.6

午後 1—36.9

午後 6—36.8]

## 二十五日

昨夜からまんじりともしない。腰の痛みは、烈しい陣痛のように、何とも堪えられない。自分は一夜、全く呪はれた者の、地獄の責苦を悩みおほせたのである。一つの体が七重にも八重にも折り畳まれたのか、足の先から寒さがじん～と襲つて来る。かと思ふと、小さなアンカの火が焰のように燃え上る。自分はうん～呻き通し、床の上にあがき通して、少しも静まらない。自分は泣き度い思ひで、夜夜中三度まで床の上に飛び起きる。けれども、熱はだん～に下るらしい。夜が明けると共に（長い長い夜だった）、熱はぐっと下つて来る。足腰の痛みが遠のく。けれども食物はまづい。根気がない。

病気になって

一年ぶりで床に就いて

ひがな一日 力ない眼に見詰める

くすぶった天井にも飽々して

春めかしい晴れた月を窓の外に

退屈な心を

腹這ひになって見廻はず

枕もとの小さな雜踏

オボピリン散葉の四角い箱に硼酸水溶液

啖壺の古めかしい灰白

ごみだらけな茶椀、匙

煙草の空箱の数々

だらしなく口をあいたシース  
万年筆、紙屑、マッチ  
まだ～灰皿、時計、体温器  
読むでもなく積まれた四五冊の本と  
小さな眺めではあるけれども  
一寸一通り見まはすだけでも  
三分の時をむだにすることが出来る  
あゝ、けれども  
熱をもった体中の節々の痛み  
殊には片時も自分を休ませてはくれない  
陣痛のような烈しい腰の痛み  
その壁蟲のようなしつこい痛みを  
ほんのしばらく忘れしめるものとては  
隣室の時ならぬ革命歌  
唐突な赤ン坊の泣声である！

[×を附す]

#### 二十六日

床に就いて居ると云ふことも、決して楽なことではない。熱も七度しかないし、天気もいいので、朝から学校に出かける。出かけて見ると、風がなか～寒い。けれども大したこともない。

#### 二十七日

学校のかへり、小石川へ行く。宿る。

#### 二十八日

午後学校へ行き、小石川へ帰り、夜十二時半、家に帰る頃は、空気が氷のように冷えて、身をちぎるような風がびゅう～吹く。

---

アトリエに居て仕事をする時  
煙草をくゆらせてストーヴにあたる時  
オーバーの襟を立て、  
北風の街をすた～と逃げまはる時  
暗い電燈の下に、四角い机に向ふ時

固くなつて冷たい床にもぐり込む時

ふと私につくまとふ影——

「あゝ、私！」

それは

次々の仕事に裏切られたところで

一々運命にたてつく私ではないけれども

随分せつないことが多いにしたところで

喜びをも忘れてしまふ私ではないけれども

華やかな恋がないにしたところで

<sup>ひと</sup>優しい女の一人二人知らない私ではないけれども

恐ろしい事実にばかり行きあつたところで

小さな夢をさへ持合はせない私ではないけれども

例へば

授けられたものをも信じ得ないような

教へられたものをも疑はねばならないような

悟されたものにも逆はざに居られないような

憎まれる故に愛さずには居られないような

望みなる故に夢をも追はねばならないような

そんなものうき

そんなものうさうを一つにして

突然私に飛びかかる影——

「あゝ、私！」

いつもいつも

ふと私の考へを阻む影——

「あゝ、私！」

その光を只一歩、決して歩まうともせず

而も亦、決して後へも一歩退かず

ふと私の横顔をなぐりすてゝゆく

そんな卑劣な恥ましい

けれども牛のようにしぶとい影——

「あゝ、私！」と……

[×を附す]

## 二十九日

学校を少し早くきり上げて、倉沢の処にゆく。<sup>〔量世〕</sup>夕方から二人でカフェーに行って、ウイスキーを飲む。いい気持になって帰って来ると、<sup>〔仁三郎〕</sup>服部が来て居る。相変らず面白い。

## 三月一日

音楽学校の土曜演奏会にゆく。

寒い北風と共に、朝から雪が降ってくる。けれども、積まない。昼には止んで、雲が切れて青空が見える。日暮前暫らく、黄色い月が明るく寂しく光る。

## 二日 sunday

天気はいいけれども、気温は低く寒い。午後、音楽学校の音乐会に行く。総じて昨日のよりはいい。新宿で下車して、葵橋の小さなランチルームで、コーヒーとウィスキーで温まる。いやだつたけれども、兄に引張られて目黒に行く。案の定、目黒はよくない。保ちゃんの床がとつてある。澄ちゃん、増子サンが寝て居る。文ちゃんはしおげて居る。おばさんは癯せて居る。宗ちゃんはふさぎ込んで居る。丁度後藤が来て居る。で自分が一人で皆の中で喋り立て、ひつかきまはして帰つて来る。

## 三日

学校のかへり、<sup>〔寛〕</sup>三沢と江波を訪ねる。三人で銀座に出、キリン、プランタンにゆく。

## 五日

朝から晩まで曇つて居る

其上底寒い風が吹くでもなく吹き続ける

けれども決して雨は降らうとしない

決して日は輝かうとしない

そして自分はまたまた

身に覚えない因果の淵深く投げこまれる

アトリエの中の空気は

蜂の巣をつついたように騒ぎ立てる

道では二日も餌にありつかないような黄色い癯牛が

短かい首を突出して

のそのそと、砂利の上を、空車をひいてゆく

そしてそのように自分の考へが馳せ

そのように自分の身は重い荷の下にあがき続ける

〔蜜〕  
女は蜜のような笑ひの刺で

又針のような嗤ひの鞭で  
 自分の道に立塞がり、追ひ立てる  
 羞恥の槍が自分をすくませ  
 傲慢の斧が自分にたてつるのである  
 そして虐げられた感情が  
 鬱積し、圧倒されて  
 爪の垢程の空所を見出して  
 そこに雨を降らせ、日を仰がうと待ち疲れて顫えて居る  
 怒りが自分を駆る  
 おゝ、何の因果が自分にこの滅罪を強ふるのか  
 何の宿命の罠が自分にこの禍ひを来すのか  
 覚えよ  
 聞けよ  
 憎しみよ、咤よ、闇よ  
 総ての悪しきものらの魂よ、自分に憑け  
 応へよ  
 禍ひの馬よ、地の蟲よ、肉よ  
 総ての卑しきものらの性よ、来れ！  
 すれば自分は煉獄の底に  
 淫乱のなめくじと共に  
 貪婪に太る蛭と共に  
 憎しみの種を蒔き  
 悪の華をかざして  
 血を嘗め、骨をしゃぶって  
 その空虚な笑ひを高らかに笑って見せよう  
 すれば慎ましい猫のような善は  
 上品な偽りの蔭なる幸は  
 総て天にかかるものらの靈は  
 混濁の水に浮ぶ油のような  
 清らかな涙を流し  
 罪をかくし、汚れを被ふ愛の衣を垂れて  
 その空虚な悲しみを自分の為に泣いてくれよう……

[×を附す]

## 六日

珍らしく昼過ぎには学校から帰って、午後、多摩ちゃんの処へ行って蓄音器を聞いて来る。夜は雨がばら～～降って来る。けれども直きに止んで、後には轟々と風が残る。

## 七日

昨夜の風は止まない。決して止まないもののように、風は吹き、風は吹き、風は吹き続ける。

学校ではストーヴの煙がみな室内にまひ戻って、室中を煙にしてしまふ。寒く蔭鬱である。輝かな日は照って居るけれども、空は赤く埃り、地は乾ききってかさかさして居る。人々は青くひどい顔して、棒のようになって下を向いて歩く。午後は、全く何もしないで炬達の中にもぐり込んでしまふ。夜に入っても、風は少しでも勢をそがない。寒い日本間はがた～と揺れ、硝子戸はひどい音を立てる。そして暫らくあたりが静かになると、こーっと空の方に只一律な響が悲しくなって居る。底しれぬ復讐でもあることか、常法の定命でもあることか、自分はズ羈を控へ、ズ経を忍んで、おゝ、忿恨の悲怨の焰に埋れながらも、九時に早く床に就いてしまふ。それにしても、睡りよ、睡りよ、紫の阿片の夢よ、莫爾比涅の赤い仮死よ、幻よ、来て、暫らく自分を他界の一隅に休ませてはくれまい。

[×を附す]

## 九日　sunday

起き出でて見ると美しい。霞んでは居るけれども、雲一つない大空から、降るような日が一面に輝いて居る。冷たい風も吹かない。で斯んな日には先づ外に出なければならない。怪しげな財布を懷に入れて、兎も角も、中野の停車場まで出たが、切符を買ふまではどうしても迷ふ。どうせ始めから貪る心算で出たのだから、何でも一番いい処に行き度い。が、何を標準として一番いい処が見つけられるか、あまりに対象が多すぎるのである。ぽか～と暖い畠の中を、一人でアンパンでもかじって歩き度い。荻窪もいい。吉祥寺へも暫らく行かない。玉川だって悪くはない。そんならば、やっぱり気まぐれより頼りになるものはない。で、気まぐれが自分を三軒茶屋につれて行ってくれる。佐野の処は直ぐに知れた。何んな風だったか、自分はそれをくど～と云ふことはない。佐野と向ひ合ひで、鰯の煮たのと麦飯とで昼食を済ませ、大根の汁で、又同じ黒い麦飯で晩食を済ませ、其上十時過ぎまで佐野の畠の中で過して、十一時半になって家に帰ったのである。

## 十日

✓踏切を渡らむとしてふと立ちぬ 入日に続く四本のレール！

- ✓高き軽き種々の想ひに連れる 日々に行く道 日々に見る枯木  
 ✓小駅の改札口をかき出でて 放たれし心 閣迫る頃
- 

空を吹く風は何と悲しいことだらう  
 私は空に鳴く風が悲しいので  
 背中からぞん～と底寒いので  
 床の中にもぐりこんで  
 海老のようにまるまつては見たが  
 ふとこれは随分みっともない恰好に違ひないと気がついて  
 思はずも夜具の下で赤い舌をペロリと出したが  
 いや、これもみっとないと気がついた  
 それから冷たい足をのばして  
 首だけをによつきり出して  
 仰向になって澄ましては見たが  
 私はまた～何の為に  
 自分が斯うも澄ましたものか  
 若しも天井に鏡でもあつたらと思って  
 ひやっとして横を向いて了ったが  
 「やっぱりいけない」  
 思はずも一人言ふてすご～と  
 始めのように床の中にもぐりこんだが  
 有難いことに、誰も見ては居なかつたな  
 誰も笑つた奴はなかつたな……  
 こう～と空に泣く風が悲しいこと  
 背中からぞん～と寒いこと

[×を附す]

### 十一日

何と云ふことだ。自分は何にたてついたらいいのか。また風だ。真冬のような北風だ。一日中しぶとく吹き続ける風だ。もういいかげんに止まないなら、俺の方でも一日中、机の前に座つたまゝ足一步外へなど踏出しつしない。そんな無精競べなら、大概の奴には負けない心算だからな。　学校のかへり、遠山サンに行ったが不在なので、小城サンに行って、夜九時過ぎに帰る。

### 十三日

あまりに味ない日が続いた後の斯んな日である。朝から春らしい小雨が音もなく降り続けたが、午過ぎになって、小雪を思はせるように底冷えがする。で自分もここらで、少しばかり気を換へなければならない。早く学校から帰って、本箱の中から埃だらけな源氏物語を引張り出して、飛び～に二三枚づつ読んで見る。源氏物語を読む度に思ふことは、こんなにも飛び離れた世界があつて、而もいつも自分を、全くどんな時でさへも、一つ心にさせる不思議な力である。番町に居た時分には、今から思ふと相當にうなづける節があったと思はれる。自分達の家は、近所隣りから思ふと如何にも古めかしく、其上建築様式までも、今一寸見られないような古いところが、ほんの処々にではあるが残って居たし、庭は広くて、而も作った庭が手入れされずに荒れはてて居たし、東京の真中には珍らしい程静かにして居たし、萩の花がうなだれて露にぬれたり、人もなげに、椋や山鳩や、いわたたきや、子連れの四十雀が桜の蕾にとまったり、樅の木の頂辺に鶴が秋も終りになると来てないたり、小春の日に頬白が無花果の枝に鳴いたり、百舌鳥が尻尾をまはしたり、鶴がいつもつげの実を食べに来たりして、随分しみじみとした思ひに誘ふようなことがあったから、夏の夜など、硝子戸に宮守の影がうつたりするのも、裏の藪にほんの暫らく入日が傾く頃、雨の後などに油蟬が、じ、じ……じと鳴いたりしたのも、今から考へると、何か一つの世界を暗示するものである。譬へば、故郷と云ふものをもたない自分に、そっと迫まる懐郷の愁心でもある。子供心を通して、ほのかにのぞき見る、懐古の憧憬心でもある。

### 十四日

朝がた、程よく湿った土に朝日が輝いた時は嬉しかったが、午には又風だ。北風は、埃をまいて荒れまはる。室に居ても、隙間風のひゅー～と寒い午後である。私が何日この風を怒り続けたことだらう。けれども、何んなにしても、何時までたっても、斯うも赤児のように悲しく泣きつゞけると、私ももう負けて、いた～しい心になってしまふ。

---

ヂヽ チヽ チヽ……

私は毎朝

けたたましいニッケルのベルの音を気にしながら

小さなくぐりをあけて

踏み出して、前の原っぱをみつけます

毎朝毎朝

いろいろな心で

時には無精ったらしく  
 稀には美しい日に勇みたって  
 なんともない枯草の冬の原っぱを見ます  
 新らしい四角い家々から  
 灰色の枝ばかりの櫻の立木へと  
 それから大きな穴のような空を  
 ぽっかりと向ふに見やります  
 空は時には暗く湿っぽく  
 けれども稀にはすばらしい深い色に輝いて居ます  
 私は決してつくづくと眺めたりなどしません  
 マッチをすって  
 パイプに火をつけて  
 わき目もふらずに  
 新開町を停車場へと急ぐのです  
 只、ほんの瞬間ではあっても  
 一日のうち、けれども  
 広やかな心になれるのは  
 冬の朝の、毎日の  
 枯草の、この原っぱの眺めです  
 日暮方  
 疲れて、ひもじい想ひで  
 北風に追はれて帰るのですもの  
 私は玉蟲色の日暮の原っぱを知りません

[×を附す]

---

いつの頃からか自分に植ゑられた惡しみの種がある  
 その花は可愛くて利口で  
 自分の裏なる口にすばらしい雄弁をもってくる  
 而もそんな時自分が  
 何んな風に、人に対しては  
 陰鬱に無口に黙って了ふか  
 そんな時自分は、人に対して  
 おづおづとおびえすくんで了ふのである  
 人はその花を驚き恐れ

汚らはしい流し目を投げて横を向いて了ふ  
何と小気味よいことだらう  
何といまいましいことだらう  
つまり斯うなのである  
自分が此の上なく自分を可愛く思ふ時  
自分が此の上なく自分に親切に対する時  
人は自分を憎み  
人は自分にたてつくのである  
自分が人を堪え難く憎む時  
自分は人を懐かしみ  
自分が人を恋ひ慕ふ時  
自分は人を妬み、蔑しみ、呪っても  
自分を生かせねばならない!  
いつの頃からか自分に植ゑられた悪しみの種である  
時ならぬ時を撰んで花咲く  
気まぐれな、けれど殉情の花である  
その花は黒くて、紫で  
極めて甘い、美しい  
自分の慰めであり、瞬時の陶酔であり  
おゝ、再び悪しみの実の忙がしい収穫である  
自他の転換に肥り  
好惡の更衣に花咲く、小気味よい  
極めて美しい、更生の情緒の慎ましい道心である

[×を附す]

### 十五日

なめらかなそよ風の春日が美しい。川路柳虹<sup>249)</sup>氏を問ふべく、面白で下車して、さて上落合を訪ね訪ねて、遂に東中野に出てしまふ。労れたので、腹がへったので、小綺麗なカレーでパンを食べて—— 川路氏の家も大がい見当がついたので、明日訪ね直す心で目黒にゆく。遠山さんに行ってそんな話しをすると、遠山さんは川路氏の親しい知合ひであることがわかり、川路氏の家も知ることが出来たので、嬉しい心で帰って来る。

---

豊かな半月が照って居た  
雲のない空は深く

まばらな星も青く明るかった  
春にはまだ早い  
三月の遅い夜である  
私は友と別れて  
ウキスキーのはのかな酔を  
乗る人も降りる人もない  
からっぽの電車にゆられて  
ひっそりと暗い田舎駅に降りたった  
白い道が続いた  
怪しげな新開地の夜はさびれて  
次々の四角い家々も  
ぐったりと疲れたもののようにねむってゐる  
のろのろと黄牛の引く汚物車も通らない  
みじめな新開地の繁栄を飾って泣き叫ぶ子等もない  
円い軒燈も光ない  
私は此の遅い夜  
ほこりっぽい白い道に  
静かに映つてゐる電柱の影を  
数へるともなく数へながら歩いた  
不自然な明るみが来た  
それはこの死んだような遅い夜に  
只独り、最後の点滅を息づいてゐる  
路傍のバラックの小さなバーである  
突然その中から  
怪しく古びた蓄音器が  
異常な雜音の中から  
猥らな唄を叫びたてた  
月光がゆらいだ  
静寂の神秘を守る夜氣は恐れに顫えた  
それは神聖な死の前にのたうつ断末魔である  
蒼白い道は尚も続いたが  
ウキスキーのはのかな酔は醒め  
三月の夜はひえ～と寒かった  
月も星も影も  
あゝ、私の心に

ただれ目の老婆のいやらしい執念か  
不吉な降誕を前兆するあさましい宿悪の反照である

[×を附す]

#### 十六日 sunday

快晴。朝のうち、原稿を持って川路柳虹氏を訪ねる。全くの自己照会で不躾に、けれども読んで貰ふことだけをお願ひして来る。一時間程も話して帰つて来る。午後は兄と東中野に出、新宿に出、渋谷のカーフェーで酒のんで遅く帰る。

[紹介]

#### 十七日

晴天なれども、風烈しく寒し。午後、麹町の野崎さんまで一寸出て来る。

#### 十八日

午後三越に、春陽会の展覧会を見に行く。何としみつたれた、いやらしい根情を見せつけられたことか。不愉快な灰色の中に、古ぼけた無愛想の机の上に、腐りかけた果物か野菜が二つ三つころがって居る。わざとらしい貧乏臭い、きたない額縁。ふし穴からのぞいたような情ない光。追従する奴等も、爺じみて居るが、それ等をおだてたり、引張ったりする先生達も、若いものをあやまたせることばかり考へて居るのではまさかにあるまい。<sup>〔劉生〕</sup>岸田氏は、兎も角に、もがいてもがいて、自分の道を作つて行った人。<sup>〔莊八〕</sup>木村氏は、兎も角、負けない氣で暗がりをぶつかりぶつかり歩いた人。だが追従する若い人々は何を間違つて、あの暗がりに入って行つたことか。而も題材によってのみ、其の趣味を僅かに解するような、融通のきかない馬車馬のような心の人々よ。而も是等の言葉は、せめて人としては、全く純良なる君等に対して投げてやるのだ。くだらない春陽賞の為に、そんなことをするような奴はまさかに居ないだらうからな。君等が春陽賞位でほや～して居る間に、<sup>〔一政〕</sup>中川氏が立派な廣々とした世界に飛び出しちゃつたことは、實に痛快である。而も中川氏は、ほんの気まぐれや偶然からではなくて、つきつめた自分の道から必然的な処に、乗り換へではなくて、ぬきん出たのであることは、敬服に価ひする。中川氏が、日本画の本然たる（対感覚的なエッセンス、更に構成的な簡略）に進んだことは、決して新らしやかな道ではなくとも、立派な道である。そんな二三の風景もいいが、クロッキーの村娘の顔などは、實にいいものである。其他には、森田恒友氏の（小川芋<sup>〔龍三郎〕</sup>錢趣味の）樹下群童などが目を引く。梅原氏などが振はないのは淋しい。

————— (昨年の秋晩く画いたスケッチをふと見出して作る)

ここは誰一人

恐らくは只一羽の小鳥さへ知らない片隅

晩秋の凋落の

けれどもまことに物静かな片隅である  
 まだ僅かに息づいて居る草の葉も  
 青いと云ふよりは黄ばんで居る  
 むしばんでゐる  
 名も知る程のものは何一つない中に  
 自然の、ほんのこんな片隅に  
 かくも復雑した技巧がかくまはれて居たかと驚くような  
 そんな復雑な、極めて技巧的な一枚のはっぱが  
 朗らかな春の永日から  
 今日この凧の秋の終りまでの  
 そんな永い日の美しい悲しい思い出の数々を  
 今一度にふりかへったように  
 嬉しい、うら差づかしい七色の紅葉に着飾って居る  
 私は只一色、褐色の雑景を静かに検索する……  
 慎ましくも運命を荷負ひ終へた枯草である  
 新らしい使命を胚胎する極めて繊細な草の芽である  
 再び子供のように、春を待ちきれないでゐる  
 小さな小さな草の冬芽である——  
 そんな物静かな片隅に老いた薊がある  
 固くなった茎には  
 すじまでもむしばまれて黄ばんだ葉の跡が  
 ひょろ～と二つ三つ着いて居るばかり  
 そんな老耄れた茎の頭に  
 まだも三つの花が咲いて居る  
 二つは枯れて黒くなつてうなだれたが  
 只一つ禿頭を飾るリボンのよう  
 突飛な、けれど若やかな藤紫  
 そのささやかな藤紫が  
 ふと私を  
 この物静かな  
 けれども小さな命の、思ひ思ひの種々相に賑はつて居る片隅へと誘つたのでした<sup>250)</sup>

[×を附す]

## 十九日

二三日前から出来出した手の甲のツツツツが気になるので、朝のうち、瀧さんに行つ

て来る。やはり、ふきでものの一種で伝染性は少しもなく、内発するものだとか。何か安心したような気もするが、決して気持はよくない。第一にきたない。第二に痒かったり、むづむづしたりする。第三に氣色が悪く、第四に仕事が出来ず、第五に外に出ることを許されない。夜は決してよく寝られない。昼間は労れてばやんとしてゐる。癪にさわる程天気がいい。

## 二十日

何うせ何も出来ないのだからと思って、朝から床に就く。ブツブツは直らない。

## 二十一日

朝から春らしい小雨が音もなく降ったが、それも暫らくして止むと、あとは重たい押しつぶされるような灰色だけが残る。川上の叔父様が来られて、喋って行かれる。自分は床の上で本を読んだり、止めたり、座ったり、寝転んだりして居る。午後は、植木が酔っぱらって来て、これはまたひどくくだをまいてゆく。日暮になってまた、雨になる。早くしめやかな夜になる。関口氏が久々でやって来る。十時に床に入ると、雨がざん〜とひどくなる。嬉しい氣がする。自分が雨を喜ぶような、ひょんな気持になったことを、自分ながらおかしく思ひながら、手のブツブツのいよ〜直らないのが気にかかる。

## 二十二日

朗らかな半日の後に、生温い風が吹いて、シャワーのような雨がざん〜とやって来る。けれど、夜十一時に廊の窓に眺めた空は深く、明るい月が輝いて居た。

## 二十三日 sunday

綺麗な朝。縁側の前の土は赤くほぐれて、暖かく水ぐんで居るし、物干竿にたまつた雨の零は、チカ〜と目にしみて煌いて居る。だがそんなことは何うでもいい。ブツブツは直らない。で、朝のうちに瀧サンに行って来る。帰って来て見ると、小石川から招かれて居る。で、夕方から出かける。地下室の連中、大童の暴食会である。食堂には、色々貼な粘紙がある。鬼も十八番茶もデバナ。健全なる胃と不健全なる舌を持つ人のみ歓迎す。食足らしてやるから礼節を知れ等。けれど、結局はいつもと少しも変らない。十一時半に家に帰って来る。自分はブツブツがあるから、決して酒を飲まない。午後半日の間に、二、三度、急雨がやって来る。

---

道いっぽい

海のようなぬかるみの真中に  
約束のように飛び込んだ小蟲よ  
いみじくも、おゝ、もがくこと、もがくこと  
みかけたところ、お前は只独り  
お前は何者と闘って居るのか、争つてゐるのか  
お前自身とか、それとも黒い幽靈とか  
おゝ、だがうまいぞ  
全くうまいことをやつたな  
疲れてか、それとも信じてか  
お前は怪しげな藁屑の小舟の上に  
いとも安々と休んで居るな  
それともそれがお前の希望のどんまりなのか  
だが馬鹿な小蟲よ  
お前はそれを恵深い方がお前の為に  
神様にも一度考へ直して頂くよう  
投げて下さった葱だとでも思つて居るのか  
それともお前の幽靈が、持前の  
貪るような享楽の赤い舌の後から  
わかりきった最後の虚しい希望に  
お前を陥れ、嗤つてやらう為に  
一寸置いてみた餌だとは思はないのか  
おゝ、答へないな  
ならば俺の方から云つて聞かせよう  
お前が其まゝ疲れと眠りとから覚めてみて  
その夢の続きのような天の花園に遊んで居たなら  
お前も此の上なしの幸者と云はれようけれど  
何うも俺の見当ぢゃ少しばかり違ひさうだ  
夏のような日ががん～と照つて  
火のような風が吹いたにしたところで  
(それも当になるような話ぢゃないけれど)  
この海のようなどぶどろが乾上つて  
お前が元の土らしい土に帰るまでには  
まだまだしぶとい奴等が、ゆっくりと  
お前を苦しめるにたっぷりな隙がとれさうだ  
解つたか、餓と云ふ恐ろしい奴がな

だが恵深い神様は、も少し早く  
小さなお前のかたをつけて下さるかも知れない  
お前がぼや～と眠って居る間に  
何うやらお前の乗って居る舟もあやしいものだ  
お前がたよりなく水を含んで了った藁屑と一緒に  
おゝ、もがいても、あがいても  
脚の先から、胸から、頭までも  
怪しげな市子の言葉に引摺られて  
泥水に潜込んでゆく姿が目に見えるわ……  
小蟲め！  
しぶとくも黙って居るな  
お前は恥づかしくないのか  
そんな卑劣なしうちで運命にたてつかうとでもするのか  
そんな皮肉の呪禁で復讐の火に燃え出ようとするのか  
俺は呪ってやる、呪ってやる  
幽靈！片意地な復讐の幽靈め  
あゝ、だが可哀さうな蟲けら  
俺はありったけの慈悲を呼んで、一思ひに  
お前を此の足の下に踏みにじってやらうか  
だが、意気地ない俺には  
それも俺には出来ない  
まゝよ、若しも俺の慈悲が報いられるものたる  
(おとなしく待って居るがいい)  
次々にやって来る重い牛車のどれかが  
立派にお前を挽潰してくれるだらうよ

[×を附す]

#### 二十四日

学校の卒業式に出る。

#### 二十五日

卒業製作展覧会なので、学校に行く。小石川の叔母様がやっちゃんをつれて見に来られる。保ちゃんと惣ちゃんにつかまって銀座にゆき、銀座通から日本橋通まで飲み荒らして、明方の三時に、雨の中を歩いて目黒に帰る。  
〔土方愛子〕

## 二十六日

真冬のように寒い。冷たい雨が風に吹かれて、春は再び何処にかくれたのか。のべつたらな北風に吹かれて、四時頃家に帰って来る。

## 二十七日

〔達〕 小室を訪ね、溝口を訪ね、建畠先生を訪ねる。〔大夢〕  
〔欄外に記す〕 [← (遠山氏夫人逝去)]

## 二十八日

昨日も随分思ひきって馬鹿げた天気だったが、今日はまた此の上なく馬鹿げて居る。雲がもく～と重り合ったかと思ふと、いつか消えて日が輝く。雨が降って来る。雪が降って来る。雪が止んで、金色の日が照り輝く、風が吹く、埃が、真黄色な埃が飛ぶ、風が吹く、冷たい。真冬だって、こんな風は吹きやしない。ぶる～震えたって追付きはしない。帽子をおさへて、足の先ばかり見つめて、駆け出す様に街を歩いても、思はずも顔をそむけて立停ってしまふ。〔知影〕 江波を訪ね、学校から彫刻をもって来て、江波の廻にあづけてくる。夜はもう早く床についてしまふ。

此んな寒さが続くかぎり、自分はもう何んなことがあっても、決して決して何もしない。誰かがうまく説明してくれないならば、自分は暗い時代の暗い思想の中に頭をつこんで、異様な迷信の中に首絞りでもしなければなるまい。明日は鎌倉にでも逃げ出しち度いものだが、それにしても手が直って、お湯にでも入らなければ。

## 二十九日

瀧サンに行って、田辺サンに行って、昼食後、英サンと国サンを引張り出して、神田を歩く。

村山知義<sup>251)</sup>様

あなたの芸術は私に願望を投げかけます。

第一に願望を、第二に……そして、無限に願望を投げかけます。

一つよりは、二つよりは……更に、斯うして壁一面にかけられたあなたの作品は、更により立派なようです。(私は神田の小さなカフェの一室で、紅茶をすゝりながら、あなたの作品があやしげに吐息するのを聞いて居るのです。)

あなたの作品は、私に願望を投げかけます。焼跡のバラックの此のカフェの四面が、ラフなクルードな厚ぼったい布で張られてあるのが嬉しいのです。更に下のコンクリートの、はげて傷ついて凸凹なのが嬉しいのです。更に、机が正確に四角かったり、円かったりするのが気になるのです。更にあなたの作品が横向に、またさかしまに、或は裏

がへしにはられて居ないのが物足りないので。更に私自身が思ひきってグロテスクな衣裳をつけて、極めて必然なポーズに化石して了はないのが不思議なのです。更に永遠のゼンマイ仕かけで、あなたの作品が永遠に不規則に活動する姿がほしいのです。更にここに富士山を根こそぎかついで来て、置いてみたいのです。更に是等の作品を、夜の空の星につないで仰ぎみたいのです。更にあなたと共に、何千尺の地に埋めて、永久に不淨な他人の目から庇ってやり度いのです。

ね、斯くてもあなたはお馬鹿さんですね。或は、かとんぼよりもちっぽけな弱虫。あなたは女のようなお方ですね。さう云へば、あなた御自身も、いみじくも歌ったのを思ひあたります。

……所詮は淨くして細々しや——と。

### 三十日

朝家を出る時に、遠山サンの奥サンが急に亡くなられた報を受け取る。泣くことも出来ない。あんな人のいい奥サンが。けれども、更にお氣の毒な遠山サン。赤チャンだけでも丈夫で居て下さるように。今日が告別式であることもつけ加へられてあったにも拘らず、自分は出かけて行く気になれなかった。出かけて行くことが出来なかった。自分には、人々の中でさわがしくお別れすることが思ひもよらなかったから。遠山サンにお会ひして、遠山サンの為に涙を見せた処で何になる。遠山サンには後で、何んにしてでもお詫びしよう。それよりも、自分は静かに一人で亡くなられた方のことを心に思つて居よう。十時五十五分の汽車で鎌倉にやって来る。

### 三十一日

せからしい都会生活者にとって  
たまさかの無精心は  
何と懐しく有難いことだらう  
私は今日一日、朗かな春の日を  
つくねんと縁側に腰かけて  
高台の庭を、別荘地の眺めを  
無精ったらしく眺めたのです  
春の海は灰青に霞んで  
遠く浪頭も見えず  
ただ～ほのかに暖かく平らです  
春早い別荘地の昼は  
安らかな寝覚前に見る夢のよう  
唐突な犬の叫びを笑ひ度く思ふ位です

私は縁側の端に  
 頭から風もない日向にすっぽりと埋まって  
 何年か見飽きたような庭を  
 たいさうな親切気をこめてみまはします  
 橙程の丸石でかこった花壇に  
 行儀よく生へ揃った小さな草花  
 やせた花茎に二つ三つ  
 ひろ～と紫色のヒヤシンス  
 藦床の間からによっきりと  
 どす赤い頭を擡げた芍薬の芽  
 三寸に足りない肥った首を  
 わづかな風にぶる～と  
 ぎこちなく撥ねっかへるいちらしさ  
 地上僅かに一寸ばかり  
 威張って咲いた片輪の桜草  
 それでも花なればこそ  
 小さな蜂めがもづ～ともぐりこみます  
 したり顔な黄水仙は一つ目で  
 目先僅かな小さな世界を大様に見やりうなづき  
 ぬく～しい日に木蓮の蕾が太るのさへうかがはれます  
 赤々とさんごもみぢの澤々しい枝先に  
 女夫のみぞざえのつゝましいお喋り  
 心持ち程大きくなつたお腹を  
 かげろふ土に長々とねそべつて  
 形小さい婆犬  
 中途で止めて了ふような  
 その無精ったらしいあくび振りと  
 さても閑かな眺めです  
 せからしい都会生活者にとって  
 たまさかの此の無精心こそ——  
 春早い別荘地のお昼時  
 頭から風もない日向にすっぽりと埋まって  
 ふと、とんだ親切気を見せた私です

[×を附す]

---

午後、二階堂に湯地を訪ねたが留守。鳶村さんに行って、夕方まで遊んで来る。

ショウのカンディダを読む。詩人は一つの世界を持って居る。牧師は善良な大赤ん坊として書かれて居るけれども、自分にして見れば、此の種の人は卑劣で傲慢で、其上悪趣味で仕末におへない悪党である。<sup>〔始〕</sup>世の中に一番沢山はびこって居て、一番いやらしい種類の人間である。それからカンディーダ。中心人物であるだけに、もっと～自覺的な性格者であってほしい。随分特異な、固性的な輪画を持って居るにも係らず、自發的な主張がないのが物足りない。運命的である。言ひかへれば、伝統的なピューリタニズムの臍の緒がとれきらない、道徳的伝統のセンチメンタリズムの臭みを、最後にはとう～かくしおほせることが出来ない。それだけ人間的であると云へばそれまでではあるけれども。カンディーダの親爺こそ、変な親爺こそ、案外可愛らしい殉情の坊ちゃんである。

三幕の間に、あれだけの事件をもり上げてしまふ為にも、恐らくは喜劇的な取扱ひ方を多分に取入れねばならなかつたらうけれども、笑劇から受け取るようないやみを、全然拒むわけにはゆかない。けれども、舞台上の効果が同じ理由によって高められて居ることも、一方に認められる。

## 四月

### 一日

何かたいしたことでもして、此の一日を三日にも四日にも感じでもしなければ物足りないような、すばらしい晴やかな日である。朝のうちを道哉のお墓に行きながら、妙本寺の境内を廻って見たり、縁側に腰をおろして見たり、築山の枯芝に登つて下を見下しても見たりするが、やっぱり物足りない。何か一つことに縛られるのが如何にも残念に思はれるので、結局は何もしないでぶら～～して了ふ。アンネやトスの奴等が、そちら中何処ともかまはずに氣楽さうに寝そべつて居るのが羨ましい。<sup>〔柴山〕</sup>午後、昌道と百合子をつれて浜に行ってみる。

風が切りと吹き出したけれども、寒い程にもない。珍らしい気持で一緒になって貝などあさって砂にねころんで、日のかけらないうちに帰つて来る。

### 二日

海も山も低い空も、只一色に霞んで居る。まことに春らしく風もなく、静かに霞んで居る。半日の曇日が午後になって雨になる。春雨には稍に烈しい音をたて、雨になる。で私は、西向の窓を開けて、低い机の上から外を眺めては、本の頁をぼつりぼつりと繰る。

全くぼつりぼつりと繰る。雨が私の心を引張るから、漱石の「こころ」が恐ろしいから、懐しいから。久々で漱石のものを読んで驚くには、私がこの二三年来、ひどく変って居る筈なのに、ちっとも変って居ないからである。漱石のものを読む時、私は何うも批評がましい気になれない。若しかしたら、それがあまりに私から遠い所のもののように思はれるからかも知れない。尤も「こころ」は、今迄に私の読んだ漱石からは、余程私に近づいて居るらしい。私は悪いものを見たと恐れる。カンディダの中の詩人を思はずには居られない（昨日読んだとき、詩人はあまり私に係らないように思はれたのである）。そして今、先生が又私の頭にのしかかって来る。尤も、「先生の遺書」からよりも、前の二つ「先生と私」「両親と私」からばかり先生が私にぶつかって来るのは、何故だらう。「先生の遺書」は、まだ～出来上らない先生だからだと云へばそれまでだが、私は出来上った先生から、少し何うにかした出来上らない先生を求めて居たからだと思ふ。

先生の恐ろしさは、目をつぶって叫び立てるようなものでは決してない。寧ろ家の中に居て、外を吹く風の音から底強い寒さをのべたらに感じて居るような心持に似て居る。それは漱石のものが静かだからだと思ふ。私はこれとよく似たものを、確か一昨年の夏だったか、矢張りここ二階で読んだ「癲狂院より」の中の一つから受取ったことを思ひ出す。力と云ふようなものに思ひあたると、独歩の「帰去来」あたりも随分恐ろしいものである。それが皆が皆、何となく違った方向から迫って来るのは、自らなる作者の<sup>〔個〕</sup>固性から来るものとも思はれる。同じものを取扱ふにしても、静かな雰囲気の中に静かな光をあてゝ見たり、水蒸氣の多い処に強烈な光を通してながめたりする所から、全体の色調やタッチに自らな差異を生じて來るのである。とまれ私は、悪いものを見た<sup>〔複〕</sup>ようである。偶然よりは今少し復雜したように、積極的に云へば、約束のようにさへ思はれる。

椿は 悲しき花  
春早く姿またくに  
地に帰るなり  
君に似る  
さだめしなかゆ  
×  
落椿  
あざやけく あかあかければ  
子らが来て  
拾ひもすなる  
遊びもすなる

忘られて  
君が み墓に  
苔のむす頃を

[×を附す]

---

芍薬の赤芽はかなし  
去年の土に  
萌えかへるなり  
あかくつやけく  
×  
春雨に  
濡れ濡れにあはれ  
あかくつやけく  
か黒なる  
去年の土には  
萌えかへるなり  
芍薬の太芽は

[×を附す]

---

ここらの海は  
青けれど  
常には見れど  
君とあそびし 思出も かすかなり  
北の海  
嶋がくり  
松の枝がくり  
千色なす雲  
百色なす たゆたふ波に  
年たてど  
止みがたな、君が  
思出はあり

[×を附す]

あゝ、霞んだ眺めに見る雨よりも  
つぶつぶと夜に聞く雨は  
あゝ、私が乗り捨てた汽車よりも  
そっと耳そばたてて  
消え去った響きを追はう汽車は――

狂ほしくも  
私は彼方、闇の中に  
はてしない黒い海に散る雨を思ひ  
終りなき旅をかける汽車に  
あゝ、私は悠久な約束の中に  
ひよんな私が生れ出で  
生きてゆくことの皮肉を観じ  
更に無関心な雨と共に  
更に真剣な汽車と共に  
あゝ、大宇宙の実在の一かけらともなり  
偉大な旅の心を握りしめたいと  
気狂はんばかり  
この暗い夜、指組みしめ  
唾を飲んで精心祈念する<sup>252)</sup>

[×を附す]

## 三日

雨は霧れたけれども、重い雲が何時までもたゆたって動かない。午後、長谷道を散歩して来る。

## 四日

相変らず曇って居る。昨日よりも一層蔭鬱に、一層不愉快に曇って居る。其上に寒い。退屈なので、又々古い本を引張り出して来る。堺利彦氏の解説にかかるレスター・ウォードの「女性中心説」である。

生物学的の解説が興味を引く。更に人間時代になってからの人類猿、猿、類人、更に有史前人の推理的な生活文化が興味を引く。突飛な男性起原説 comrade の事実、掠奪婚の遺習等が特殊な趣味心を突っつく。女性支配より母権制へ、父の認識過程より男性

支配へ、父権制へ、女性淘汰、男性開化に次ぐ男性淘汰状態より、更に男女相互淘汰的未来觀の中を、男女の変遷争闘の種々相が、極めて突飛に、極めて必然的に描かれて居る。更に五種の愛を説き、極めて樂觀的な経済組織の理想化を描いて、實に立派な自然主義的なパラダイスを夢みて居る。とまれ、私は此の書を読んで、自身があなどりがたい利己主義者であることを思ふ。何故ならば、著者、解説者等が、極めて自然的に自己を生かさんが為に、大世界を相手に全身的革命努力を惜しまないまに、私は自己を生かさんが為に、現状を無視しやうとするからである。と云ふのが、私には斯うした理想に対して、全社会を対象とするような希望に就いては、全々悲觀的なのである。私は勿論社会力を認める。けれども一個の自分を必ずしもこれに順応させたくも、させようとも思はない。私は著者、解説者の理想には賛成である。そんな人々が居て、□□□□□□□□□□□□  
□□□□□□□□□□□□、現状を変えて社会を私の生活に幾分でも必然性を与へてくれる  
ようなものに高め、或は引おろして呪れるならば、私は著者、解説者に感謝しなければならない。

いちにち  
終日の曇日は  
私にひそやかな観想の美薫をかがしめた  
蔭鬱な、不快な  
只々単律な灰色は  
瞬時にして久遠なる沈黙  
雲は、海は、眺めは、  
あゝ、幻滅の私から  
華やかな未知の花園を  
あゝ、あまりにきらびやかな未来への夢を  
希望を  
不吉な予感の怖れと共に  
怪しい怨念の奸策の予感と共に  
あゝ、残酷な露骨な親切を以て  
かきむしり、ひきちぎってしまった  
そして今、ここに残された灰色  
一切空  
恐れなく、よるべなく  
直ちに、一すぢに無に連なる生屍の  
虚しい、虚しいその観想の美薫を  
あゝ、私はここに静かにかぎわける

[×を附す]

## 五日

晴。英子サンを鎌倉の駅に待ち受けて、九時三十四分の汽車で横須賀に行く。ランチをミスして、はしけで行く。忠坊の喜ぶこと。佑サンの乗って居る練習艦隊が、今朝入ったのである。堤を迎へに六郎が浅間<sup>253)</sup>に来て居た。艦で昼食して二十五十四分の汽車で皆で鎌倉により、五時半の汽車で帰京。

## 六日

出科の所へ行き、途中雨に降られて、田辺サンに逃げ込み、昼食後、園田<sup>254)</sup>サンに行く。梅子叔母様も丁度来て居られる。雨は益々ひどい。夕方帰る。

## 七日

雨。遠山サンにおくやみに行ったが、留守なので、小城サンに行き、夕方帰る。

## 八日

怪しい天気を何うにかもちこたへて、午頃から明るい日が照って来る。朝のうち、(虹柳)川路サンを訪ねたが、来客でおちつかないので、黙って書いたもの置いて帰って来る。久顕サンと三越に行き、レインコートを買って貰ふ。柳屋で昼食をすませて丸ビルに行き、久顕サンと別れて帰って来る。久顕サンは鎌倉へ行った。

お前の机はなかなかいい

お前が居ないので

今日も

独り、お前の机に向ってみる

いつか日がまはって

東向の窓から

さわやかな風が吹く

屏一面に

明るい日が照って居る

椿の葉が白く光って居るが

(こんな小庭の片隅だ)

黄ばんで、よごれて  
どっちかと云へば、みすぼらしくないこともない  
それでも葉裏葉裏に  
時色の固い薔が太るのを見れば  
優しい乙女椿の花が  
小さな眺めを添へるもの  
間ないこと——  
私は、お前の机に  
少しばかり並んで居る歌集の  
見なれた背文字を  
一つ一つながめてたが  
さて引出して  
頁を繰る程の気も持たない  
屏越しの井戸傍会議も聞えず  
いつになく  
ひっそりと静まりかへって居る  
で、私は灰色の壁と  
幽かな煙草の煙とを  
どっちつかずに、ぼんやりと見つめて居る  
ね、そんなに——  
お前の机はなかなかいい  
お前は今頃  
小さい従妹達にとりまかれて  
「お三時」を食べて居るのだろう  
それとも、久々に静かな海辺に出て  
歌のことでも考へて居るか……<sup>255)</sup>

[×を附す]

---

夕方、佑サンがひょっこり出て来る。夜、雨。

### 九日

夜来の雨は止んで、弱々しい日が照ったりかげたりして居る。そしてそのように、チャッテルトンの考へが、アルフレッド・ドゥ・ヴィニイの運命觀、社会觀が、チラ～ときわどく振り廻る。チャッテルトンよ、小さな慰め、私への贈物。おゝ、だが君

もせっぱつまるまでは何うにも出来なかつたのだな。あゝ、けれど又反対に、せっぱつまれば何んなことでも出来たのだな。其上アルフレッド・ドゥ・ヴィニイ君は、君自身の生涯と君の作品とで二つの道を同時に生きたのだね。君は貧乏人の為にチャッテルトンを送り、金持ちの為に君自身がお手本になって呉れた。で私は何うか。今は貧乏人でも金持ちでもないのだ。だがやがては其の中の、何ちらかになるのだ。だが今こそ夢を見て居たものが、本當になって來たのだ。私は今こそ、どちらになつても恐れることがないだらう。只只キティよ、ここにもまた一人のチャッテルトンが出来さうなのだ。その時、キティよ、何うか忘れずに来て下さい。さなくば、あゝ、あまりに淋し過ぎる。あまりに淋し過ぎる。

ストリンドベルヒの「火いたづら」と「最初の警告」をも読んだけれども、これらの小さな喜劇は、今日の自分には僅かな苦笑にしか値しない。只、こんな考へを幾らかでも強める人生の中のあらゆる劇的な要素は、総べて「遊び」であり、「余猶」から生れるのである。遊びが終った時、沈黙がそこに残り、「余猶」の尽きた処に、永遠に続く道が只一つ開ける。

〔本田〕 謙二叔父様が来られる。中沢夫妻が赤ん坊をつれて信州に發つてゆく。十時半になつて、全く平和になる。

#### 十日

朝早く川路氏の宅を襲ふ。けれどももう已に遅過ぎた。川路氏は旅立つ前で、閑玄〔ママ〕で顔を見ただけで辞さねばならなかつた。自分は何うしていいか解らない。兎も角、其辺をぐる～当もなく歩いて、結局東中野の停車場まで出る。けれども、まだ何うする心算なのか自分にも分らない。家には帰れない。で兎も角も、新宿までの切符を買って、電車に飛び乗る。新宿で降りて見て、更に何の当もないのに驚く。そして、ほんの気まぐれで京王電車に乗って篠塚に行く。水村の家には君ちゃんが一人居た。自分は二階のソファに寝そべったきりで、ぱつりぱつり用もない無駄話をしたきりで、一時間の後に新宿に戻つて来る。或る小さなカフェーで紅茶をすすりながら、君ちゃんに証状を書く——今日はむしゃ～して居ます。で、ほんの気まぐれであなたの処を尋ねたのです。そんな訳で、若しもあなたが退屈なさつたか、もっと悪ければ不快に思はれたならば、許して下さい——と。自分で馬鹿らしく思つて家に帰る。と中井サンが来て居る。家のもの達と直ちに四谷に出かける。三河屋で昼食をとつて、母と別れて中井サンと兄と三人新宿に出る。カフェーで酒を飲んで、中井サンは隊へ。兄は目黒へ。而して自分はまた～家に帰つて来る。

---

朗らかな春日よ

自分が人並に  
朗かだ、闊かだと云つてやるのを  
自分は、せめてはお前に対する  
最悪の侮蔑だと思って居るのだ  
桜が咲いたとて  
緑がほんの少しばかり萌え出たとて  
それが何だ  
今日自分に極めて重大な二つの訪問が  
自分に何を持って来てくれたか  
第一の訪問は  
自分に限りない羞恥を投げかけた  
自分はそれに対して極めて道徳的に  
全き無感覺を装って  
虚笑の底に憤怒の涙を飲んで  
無造作にその喜劇の幕を下した  
あゝ、自分はそんな卑劣を敢てしたのだ  
そして第二の訪問は  
自分は全く見当違ひの復讐で  
一人の少女を驚かしてやったのである  
彼女の驚きが瞬時を用ひずして  
悲しみと恐れに変ったのを自分は見た  
おゝ、何といふ小氣味よいことだ  
あゝ、それなのに三十分とはたないうちに  
自分は小さなカフェの一室で  
味気ない紅茶をすすりながら  
二度目の屈辱を忍ばうとは！  
自分は彼女に自分の無礼を謝する為に  
粗末な紙片に鉛筆を走らせたのである  
而も自分はそれを顫へる手でもって  
恙なくポストに投げこんで了つたのである  
あゝ、彼女は今  
二度の驚きを涙して驚いて居るだらう  
あゝ、自分が自分の無力に顫へて居る時  
羞恥に俯いて居る時  
出處のない憤怒を

粗暴な苛立ちから、止み難い悲しみに移す時に  
 あゝ、春の嵐よ  
 自分をも他人をも埋めかくす為に  
 ある程の砂埃を巻き上げるがいい  
 そして嗄れた咽に痛い酒よ  
 燃え上る黄色い酒よ  
 あの馬鹿らしくはしゃぎたてる安蓄音器の噪音をも  
 あゝ、暫らく自分の為に  
 天上の頌歌と化せしめよ  
 さなくば今、浮薄な自分をして  
 貪りの前には身を二つに裂かれても死にきらない  
 餓鬼道の有情にも憑かしめよ

[×を附す]

## 十一日

暖かい。学校に一寸顔出して目黒に行き、遠山サンを尋ねて夕方帰る。夜、関口氏が来て宿る。

## 十二日

〔眞三郎〕〔熹朝〕  
 関口氏と赤羽の工兵隊に、中井、伊藤の両氏をたづねる。日暮前から日本橋に行き、ムーラン・ルージュでヴォッカを飲む。十二時半、関口氏の下宿に行って宿る。

## 十三日 sunday

雨。午後、関口氏と別れ、江波を尋ねて、夕方家に帰る。赤ン坊が帰って来て居る。  
 ぶす～～～～よく泣く。

## 十四日

あゝ、自分には暫らく休息が必要になったらしい。身も心もひどく労れて居る。今日から十日の間、自分は何もかも抛って、出来るだけを休息しよう。

午後、小石川へ行く。宿る。

## 十五日

午後、江波を尋ね、一緒に夕方、原瀬の処に行き、十一時過ぎ家に帰る。

ま夜中  
四圍は只寂として  
何の響もない、音もない  
枕もとの金時計は二時を指すのに  
部屋には明々と電燈が燃え  
そして私はもう決してねむらない

灰皿の真中に  
燃えさしの煙草がいつまでもいつまでも  
細やかな煙を立てる  
全き沈黙の中に、煙は  
七色の輪を書きながら  
一すぢに真直に昇ってゆく

春なのに、蒸々と暑い  
ま夜中——  
熱く湿った毛布  
体中にジッとにじみ出た汗の  
なよ〜と媚びやかな快さ  
あゝ、私は三つの夢に怯え親しむ

花々しい沈黙と  
明るい孤独と  
ぢっとりと身をつゝむ氣味の悪い幸福と<sup>256)</sup>

[×を附す]

#### 十六日

終日しみったれた雨が降って居る。午後、学校にゆき、石膏屋に行き、借金を払って来る。江波の処によって、四時には家に帰って来る。文ちゃんが来る。

#### 十七日

〔光二〕今日は、青木の命日である。で、例年の通り椿を持って出かけ度い。けれども番町の焼跡に行って見てもそれらしい木もなく、花一輪咲いて居ないので、九段の下で花を買って、河田町に行く。けれども行って見ると、新らしい木札に、全然違った名前が記されて居る。失望して、当もなく何処かで偶然に聞きあてる位ひを想像しながら余丁町の

方へ歩いたが、聞くような人も通らなければ、そんな街もない。で東大久保まで出て、譲二叔父様の処を訪ねたが、留守なので、昼食を御馳走になって辞し、再び河田町に出て、元の青木の家で尋ねて見たが、高輪南町とばかりで、番地はわからない。兎も角も、万世橋に出、品川に出て見たが、巡査も知らない、案内図にも出て居ない。当もなく南町をさがしまはったが、見当らない。松元の家を訪ねたが不在。品川から代々木に出て甘露寺を訪ねたが不在。天気は怪しく暗くなつて、ひや～と風が冷たくなる。で日暮前に花束を空しく持つて、家に帰つて来る。夜驟雨あり。勞れてしまふ。あゝ、此頃の天気のように、荒んだ心が続く。こんな時、赤ン坊よ、泣け泣け、思ひきつて氣まぐれな笑ひの後に、火のように泣け。

#### 十八日

朝、岡村のお小母様を尋ねる。而して青木の処も解つたが、そのまゝ神田で油土を買って小石川へ行く。

#### 十九日

一日小石川で、何ともなく過してしまふ。晩九時に家に帰る。

意志が阻まれる！

何がそんなことをするのか？

教だ！

教は嘲笑の蒲を裏に匿す黒い表だ！

道だ！

道は哀憐の涙の蔭にたくまれた卑屈な奸計だ！

火は何処にある？

心臓の中に赤い血が流れないので？

血は已に何物をも爆発させることができないので？

革命の根は地の下に枯れたのか？

それでも命が何処かの片隅に息づいて居るので？

意志が阻まれる！

情熱よ！

それ故にお前が凍えて了ふ権利が何処にあるのか？

そんな義務をお前の何処に感ずるので？

熱情よ！血よ！火よ！

振ひ立て！舞へ！主張しろ！  
すばらしい夕焼の空を焼き印せ！  
灰色と籠との大海の力を以て浪打て！  
恐れるな！  
犠牲を恐れるな！  
煙突の大森林から燃えて天を黒める煙が  
何んな犠牲を求めたか？  
幾多のたくましい腕を萎へしめなかつたか？  
幾多の健全な命を、魂を損ねなかつたか？  
幾千年の夜と昼とを賭けなかつたか？  
何を創造したか？  
百千年の夢を此の地の上に呼びはしなかつたか？  
バベルの塔が空に向って伸びる姿が見えないか？  
始めて立てられた意志は、守られねばならない！  
初めて立てられた誓は、繼がれねばならない！  
幸と不幸とを  
禍ひと敵とを越えて終りまで戦はれなければならない！  
完成と破滅とを越えて果たされねばならない！

意志が阻まれる！  
けれども情熱までが枯れ尽きたとでもいふのか？  
教が何んだ？  
奴等は空が怖いんだ！  
小さな過去が惜しいのだ！老耄の隠居め！  
ことば  
道が何だ？  
女が、弱蟲が  
目的もない利己から他人をも陥れようとするのだ！  
ひと  
現在が何れ程いいのだ？  
泣言をせめての喜び位に思ってゐるのか？  
未知を恐れるのか？  
未知を恐れるのか？ それで何が出来るのか？  
何を待つて居るのだ？  
濁流の、大河の中の、そんな卑屈な信仰の小さな杭に  
何か流れて来て引かかるとでもいふのか？  
芥屑でも永久に引かかればいいが！

魚等は喜んでお前から逃げる  
 生きたものとては蟲けら一つ頭を下げては通るまい！  
 美事な憐情だ！  
 だが他人にまで巻ぞへを食はせるとでも思ふのか？

意志が阻まれる！  
 けれども情熱がある！  
 意志がある！太初の誓ひがある！  
 空だ！  
 今に空が真赤にぬられる時がきっと来る！  
 未知へ、総べての過去と現在でないものへ！  
 進むのだ！  
 弱いものは犠牲の為にあるのではないのか？  
 弱蟲はよりよき者の犠牲となって喜べ！  
 酔悪と苦痛と、善と美とはいつでも喜んで対象を変へるとりとめもない豚だ！  
 進むのだ！闘ひだ！  
 血よ、火よ！革命よ、嵐よ！  
 空は遠い！空は遠くない！  
 前進だ！勝利だ！命だ！  
 そして空だ！  
 上の上に無限の上がある空だ！

[×を附す]

## 二十日 sunday

天気はすばらしくいい。留守番を仰つかって、只一人になれたのに、籐椅子にねそべって、自分らしい世界に入らうとする時、国サンが来る。譲二叔父様が来る。家の者が次々に帰って来る。そして、夜が十一時になってしまふ。

友達よ  
 殊には親しい友達  
 又血につながれた人達  
 骨肉よ！  
 随分永い間の腐れ縁だったな  
 幸ひにまだそんなに深くはない

けれどももう先は見てゐる  
もうここらでいいかげんに後を向く方が  
お互に何んにいいだらう  
此の先をお互に歩み寄らうものなら！  
それこそ大変だ  
僕等はお互に小説よりもみじめに  
罵り合ったり引搔き合ったりしなければなるまい  
僕は君等と顔で笑ひ合つてゐる時  
否、心で語り合つてゐる時でさへ  
剣を持った僕の手が  
僕の後に顛えるのを何うすることも出来ない  
恐ろしいことだ  
あゝ、君等が全くの他人だったなら！  
僕は恐れはしないのだが  
それも僕が全くの悪党になりきれたなら！  
君が全くの悪党だったなら！  
僕は恐れはしないのだが  
何故君は僕にさう優しくするのか？  
何故僕は君等を見ると優しくなつて了ふのか？  
お互に用心しやうぢがないか  
僕は君等が僕の苦しみを思つて俯くのを見ると  
恭く涙が出る  
だが君等は、何故僕の苦しみから全くかけ離れたような苦しみばかりを  
僕になすりつけるのか？  
僕は君に要求する  
何うか程よくお互に側を向いてくれ  
でなければ、僕が君の手をとった瞬間に  
君の胸を抱きしめた瞬間に  
僕の剣は君の咽笛を突刺してしまふぞ！  
恐ろしいことだ  
友達よ  
殊には親しい友達  
血につながれた人達  
骨肉よ！  
どうかこれまでの永い間の腐れ縁を美事にふりきってくれ

お互に顔を見ないようにしよう  
 顔を見てもお互に笑はないようにしよう  
 笑っても泣かないようにしよう  
 泣いても手を触れないで!  
 あゝ、どいてくれ、どいてくれ  
 僕は君に要求する  
 お互に近寄って、近寄って  
 殺し合ふようなことのかはりに  
 どいてくれ!  
 そしてお互の間を  
 ロマンスとエピソードでのみ  
 とび～に綴ってゆかうではないか

[×を附す]

## 二十一日

空は綺麗に晴れて暖かいけれども、ひどい風が吹く。早昼をすませて、小石川へ行く。  
 宿る。

## 二十二日

晩は、ロボットの立チだったので、見て十一時過ぎ家に帰る。

## 二十三日

学校に一寸行って、月謝をおさめて来る。小石川へ一寸寄り、三越により銀座に出る。  
 銀座で七年ぶりに中川久順<sup>257)</sup>に会った。一緒に中川の家に行き、夕飯を共にし、十二時過ぎ家に帰る。

## 二十四日

片柳茂から葉書が来る。本多正震が結婚するので、祝物を贈らうといふのである。で、直々に橋原良一郎を渋谷に訪ねる。久々であって、はじめのうちは話がはづむ。けれども、二時間もすると退屈する。

帰って来ると、関口氏が来て居る。家の中は、佑サン達の荷物でごったかへして居る。赤ん坊は起きて居る間、人をはら～させる。

## 二十五日

怪しい天気が泣き出しあうに見えながら、一日持ちつゞける。家の中は相変わらずごた

～して居る。自分は十分と一つことを考へず、十分と一つ所にじっとして居ない。そんなにして、皆で夕食を四谷の三河屋で食べて、佑さん達は八時半の汽車で大阪にたつてゆく。一年ぶりで赤ん坊から逃れたのである。それは余りに淋しい時もあるだらう。けれども、どっちにした処で生活は一変するだらう。兎も角も、それは一つの望みを投げてくれる。

夕方からひどい風にまじって、雨が降ったり止んだりする。夜に入って風は嵐めいて唸き立て、咽が渴き、頭の中に砂山が崩れ落ちる。

### 二十六日

午前、川路氏の所へ行ったが、忙がしくて会へない。自分が蟲がよ過ぎるのか、自分が人がよ過ぎるのか、世間がそんなものではないのか、自分が坊ちゃんなのか。兎も角も、あたりは暗過ぎる。三越に行ってアクションの展覧会を見る。つまらない。あてもなく銀座を歩きまはって帰って来る。アンドレーエフの『殴られる「あいつ」』を読む。大した慰めだ。過程は説明されてない。ほんの少しばかり、全く必要なだけを指示してはあるが。其故にこの芝居は極めて本質的である。〔普遍〕的確と云ふことは、時に立派に並偏性を限定して了ふ。「あいつは」自分にとって全く有難い慰めだ。悲劇だ。人々は、いつもこいつも自分を守って、決して他人をいれないのだ。そして、事実はそのように全くびし～と運命の錦を織り出すのだ。同じ結果が平氣で、まるで違った解釈を許して置くのだ。ここに人生の喜劇的因素が多分に潜んで居る。自分達は、安心していいのだ。全く安心していいのだ。あまりに淋しいと云ふ奴があるか？ 小さな喜劇の一幕ぢやないか！

### 二十七日

お昼頃、梅子叔母様が昌道をつれて来られる。午後、建畠先生の処に行き、江波の家へ行き、八時半頃帰って来る。

### 二十八日

物足りない一週間が過ぎた。何もかも、何もかも決してよくない。けれどもあせるまい。午後、神田に出て、九月以来持たなかった油絵の道具を揃へて来る。本も二冊程買って来る。少しばかり落つきたいものだ。

### 二十九日

十のもの百のものが一所になって、自分の心を苛々させる。沢山のものが望みのように出でて来さうで、何一つ出で来ない日だ。すばらしく天気はいい。昼前、東中野をぶら～歩いて来る。外へ出れば気持がいい。緑がそこにもここにもぶん～匂ってくる。

乾いた鉄道釧路に陽炎はぐら～立ち昇る。けれど芥っぽいことよ。埃っぽいことよ。帰って来て、風呂に入って寝椅子に横になって、忘れたような仏教美術を読みはじめると、お玉様が玄関口からどなって来られる。いつものようにおかしさうに一人で笑って一人で喋って、自分の頭の中のものを、みんなふら～と追ひ出してしまふ。羨ましいことだ。なきないことだ。

### 三十日

動坂の石膏屋に行き、小石川へ行き、台をかりて江波の処へより、小さなブロンズの首をもって、夕方、竹の台に出品の手つづきをして来る。上野から又小石川へかへる。晩は久しぶりで、例のさわぎがおっぱじまる。飲んで、踊って、駄弁って、三時にやつと床につく。

## 五月

### 一日

九時過ぎに起きる。午後、〔豊四郎〕木山の処へ油土をかへしにゆき、学校によって様子を見、〔にカ〕江波の処へ風呂敷を返しきゆき、夕食前、家にかへる。労れて居るので早く九時には床に就く。

### 二日

朝のうち、ロマン・ローランの「狼」を読む。

午後小石川へ。晩は早く九時には家に帰って来る。水蒸気が多く、空気はべた～して気持が悪い。

春も深く

蒸々と暑い夜

何といふ騒々しい犬らの啼方だ

私が何事かに耳を傾けようとする

こんな真夜中

私が見えないものをも見

聞こえない幽かなものをも聞き

物皆の寝しづまる時に

静かにめさめて働くものらを

秘密を捕へようとする時

何と騒々しいことだ  
縁の下から縁の下へと  
お前らは吠え廻り  
喚き合ひ、かみつき合ふ  
何がそんなに悲しいのか?  
闇か? 静けさか?  
見えないものの姿  
聞こえない声の恐れか?  
何がそんなにお前達を苛立たせるのか?  
それとも到底私は詩人で  
お前らの訳もないいがみ合ひこそ  
がさつな乱心こそ  
深夜の秘密  
私の夢の中身だったのか?  
それにしても、犬らよ  
静かにしてくれ  
私も亦疲れた心故  
暮はしい夜が終って  
光が物の外皮ばかりを照らし出し  
疑惑が内觀を許さず  
迷妄が私をかりたてる前に  
暫らく安らかに休みたいものだが

[×を附す]

### 三日

朝から晩まで蔭氣な雨が降り、寒い。朝、江波を誘って合同展覧会<sup>258)</sup>を見る。<sup>〔量世〕</sup>倉沢と図書館の版画展覧会をのぞき、博物館に入ったが、震災で本館の方は怪しげに壊れかかって居て、前館の方だけしか見られない。四時半まで倉沢の処で過して、慶應のホールにブノフの独奏会を聞きに行く。帰り白十字で松方義三郎<sup>259)</sup>に六七年振りで逢ふ。長いこと喋りこんで、十二時に家に帰る。

---

何がわしを後から後からと押上げるのかな  
何がわしを少しでも休ませようとはしないのかな  
何がわしを高みへと高みへと登らせるのかな

あゝ、わしが一步登れば、又一步登れば  
 わしの眼界はとみにひらけてゆくぞ  
 今迄見えなかつたものが一つ一つ見えてくるぞ  
 眺めはいつのまにか倍になり百倍になったぞ  
 あゝ、けれどわしは苦しいぞ  
 空気は段々味を失ってくるぞ  
 わしの目はあまりに多くのものを見るぞ  
 わしの眼は労れて来るぞ  
 心には霞がかかってくるぞ  
 冷たい霧がわしの口を噤ませるぞ  
 汚れた血を洗ふので心臓は忙がしがってゐるぞ  
 汚れた血は溢れて眼から鼻から滴るぞ  
 皮膚の下に渲んで黒くなつたぞ  
 それでもわしは登らなければならぬかな  
 わしは何をしなければならないかな  
 わしは何をすればよいのかな  
 あゝ、其上大きくなつた眺めはきたないぞ  
 物の裏まで、裏の裏まで見えて来るぞ  
 物の裏まで見てもいいものかな  
 物の裏まで見てもかまはないかな  
 わしは光の美しさを知つてゐるぞ  
 光は物の外を照らすぞ  
 だが闇は恐ろしいぞ  
 闇は物の裏をも照らすぞ  
 物の内をも見せるぞ  
 闇は物そのものを映すぞ  
 あゝ、わしは苦しいぞ  
 わしは苦しむ為に登らねばならないのかな  
 わしは死ぬ為に登らねばならないのかな  
 麓で見た頂はどこにいったのかな  
 わしにはそれがすばらしく綺麗に見えたがな  
 わしはそれをめがけて登つたのではなかつたかな  
 だが頂はどこにかくれたのかな  
 わしが近づけば近づく程遠くなるものはなにかな  
 眺めは大きくなつたぞ

眺めは倍になり百倍になったぞ  
だが霞んで来たぞ  
きたならしくなったぞ  
頂は美しく輝いて居たぞ  
頂は近くなる程遠くなつたぞ  
頂は今見えなくなつたぞ  
闇が物の裏を照らすぞ  
わしは死に近づいたのかな  
だが死はそんなにきたないものかな  
だが死はそんなにきたないものかな  
わしの脚は曲ったぞ  
わしの首は垂れ下つたぞ  
わしの息は衰へたぞ  
空気は鉛のようになつたぞ  
美しいものがみんな思出の中に倒れたぞ  
死の先には何があるのかな  
死の先にまだ続く道があるかな  
わしは登つたぞ  
わしは登るぞ  
あゝ、わしはまだ登らねばならないかな  
わしは何をしなければならないのかな  
頂はどこへ消えてなくなったのかな  
闇が物の裏を照らすぞ  
あゝ、わしは苦しいぞ  
何がわしを後から後から押上げるのかな  
何がわしを少しでも休ませようとはしないのかな  
運命とは何かな  
約束とは何かな  
近づけば近づく程遠くなるものは何かな  
わしの眼はもう何も見えなくなつたぞ  
だがわしの心が闇をも見るぞ  
これは恐ろしいことだぞ  
あゝ、わしは少しばかり休んではならないかな  
わしを少しばかり休ませてはくれないかな  
何がわしを登らせるのかな

何がわしを登らせるのかな  
 あゝ、わしは苦しいぞ  
 死の先には何があるのかな  
 死の先にまだ続く道があるかな  
 それが何かな  
 命とは何かな  
 目的とは何かな  
 目的はどこにあるのかな……  
 だがわしは暫らく休みたいものだな  
 わしは少しばかり休みたいものだな<sup>260)</sup>

[×を附す]

## 四日 sunday

午後、江波を尋ね、小石川へゆく。で明日は泥を運ばせることが出来るし、まあ～兎も角も、早く片づけ度いものだ。今日は早く、六時前には家に帰って来る。

## 五日

午後、江波の所へ行き、土を小石川に届け、夕方、保チャンの誕生日なので、銀座によばれる。目黒へ行って宿る。

## 六日

遠山サンに寄って、昼前に家に帰る。

## 七日

朝から小石川へ出かけ、日暮に帰って来る。

## 八日

昼前から雨が降ったり止んだりして居る。晩には道は田圃のようにぬかるんで、不愉快。さうぢゃない。道が悪いことをのけても、実に不愉快な日だった。恐らく生れてから今迄に、不愉快さに於てこんな不愉快な日に逢ったことがない。実に不愉快だった。

## 九日

昨日の不快が、だにのようにこびりついて、朝から何にもしない。馬鹿馬鹿しく自分の頭は神経質になって居る。くだらない午前の後、午後外にでる。と狂者のような風が吹く。ギラギラ光るような陽の中に、冷たい風が荒れまはる。溝泥のような道がその

まま乾上って、白くなつて、ぼろ～崩れて煙のような塵を思ひきり舞ひ上げる。顔から頭から埃にうづまって、時ならず霞んだ風の眺めを見るのは——こんないやな日に、昨日の後の今日——實に愉快である。あゝ、實に愉快である。

---

[欄外に記す]  
[昨日のこと]

やに色の暗い晩です  
雨が降つて  
たんぽのようなどぶどろの道でした  
私はぱしゃりぱしゃり、泥水をふんで  
ゆっくりゆっくり歩きました  
腑甲斐ない私です  
待つて下さい、私を困らせたのは  
闇でも泥水でもないのですが  
重い首をうなだれではゐましたが  
私は決して足もとに気をとめてはゐませんでした  
暗い闇が私の前を遮りましたが  
私は決して先を見きわめようともあせりませんでした  
どぶどろが私の靴を汚したところでたいしたことではありません  
けれども、あゝ  
私の憤懣は  
例へば的を失った鉄砲よりも無意味なものでした  
私の悔恨は  
例へば白日に燃える蠟燭程も力ないものでした  
人は正当な誇りをさへ傷けられることがあるものですよ  
弱いものに弱さを示されては堪りませんよ  
心を見る眼を持つ人々の前に  
暗い、湿っぽい  
みっともない心です  
(貧乏を見たと詠った詩人がありました)  
えゝ、私は今貧乏を感じのです  
私は今貧乏を感じたのです  
□□□□□□□□□□

[×を附す]

十日

三越に行って、湯地への贈物を買って、鎌倉へ行く。宿る。

## 十一日 sunday

湯地の所へ行き、昼過ぎ家に帰る。小石川へ行く。

## 十二日

午後、小石川へ。

## 十三日

二三日寒い。朝、三越に仏国絵画展覧会を見に行く。ヒカール・ル・ヅウ、カモアン、オットマン、デュフィー、シニヤック、マチス、マイヨールのスケッチ、ヴラマンク、フリーエス、マンガン。確かにそれだけで、水彩が多く、あまり大きなものはない。ヴラマンクは飽きる。オットマンも一律である。只一つ、離床と云ふ油絵の小さなものが、手法は全然同じものだが、色だの調子だのが大変に柔らかにおちついたのがあった。マイヨールはマイヨールらしく、マチスのも鉛筆の二枚だけだが、マチスらしい。ヅウの油絵はバックの空色がひどく好かない。三枚の水彩はなかなか興味深いものだった。それと、デュフィーも、水彩の方がよかったと思ふ。カモアンは煮えきらないし、シニヤックは全然モザイクの面白味より以上でない。殊に水彩はフリーエス、マンガンと共につまらない。ヅウとデュフィーの水彩が自分には一番よかったように思ふ。一般に色は大変に綺麗である。

夜は本郷座<sup>261)</sup>にゆく。お七吉三、長唄はやし連中一幕、摺州合邦辻チョボ一幕、御存じ梅の吉兵衛二幕に「どんつく」である。久々で旧劇を見て、間がぬけて居ると思ふ。尤も出物も出物だが。

## 十四日

朝から小石川へ。午過ぎ帰り、夕方から本多正震の処に招かれてゆく。正震がこの三日に結婚したので。

伊達十郎、久松定武<sup>262)</sup>、小山直彦、中川久順、松平嬌<sup>263)</sup>、片柳茂、甘露寺方房、木越進、高橋茂雄が来て居た。

## 十五日

昨日から降り出したしみったれた雨が、終日梅雨時のようにじめ～と降りつづけて寒い。一日家に居て、自分の壁部屋にとじこもって居る。昨日の今日だ。どうもみじめでいけない。其の上、時が大変に悪い。先日来、と云っても、もう余程以前から本が読めない。殊に組織立ったことが何一つ出来ない。頭は馬鹿のように散漫になって居る。永いこと手紙一つ書かない。信仰もセンチメンタリズムもなくなつた。自分にこんな、しみつたれた灰色の貧乏臭い臭気は合はない。で退屈しのぎに、壁一ぱいに大きな印度

更紗をはりつける。一方の壁には、自分で画いた水彩画をべたべたはりつける。簾の寝椅子の上には、赤い羽根布団を敷いて、さてマニラの極上といふ葉巻をくはて見る。けれど、それにした処で、たいした慰めにはならない。終日何もしない。

#### 十六日

動坂の松平に、小石川に行く。

#### 十七日

朝のうち、川路氏を訪ねる。運よくゆっくりと話しも出来、詩も一寸見て貰ふことが出来る。

夕方から湯地の婚礼披露で、芝の三緑亭に招かれる。安場保国、上原七之助、松元泰彦が来て居る。夕方より雷雨。

#### 十八日

昌生叔父様が帰られたので、家中で鎌倉によばれる。讓二叔父様も来て居られ、晩は薩摩寿司のおもてなしで、人々お酒を過ぎす。宿る。

#### 十九日

帰京。

#### 二十日

怪しく曇って居たが、午過ぎからひどいどしゃ降りになって、晩まで降り続ける。朝から江波の処へ行き、合同展覧会が終ったので、出品を受取って来る。雨がひどいので、江波の処でお茶をにごして居たが、止みさうにもないので、夕方、本多正震を尋ねる。丁度出先きなので、一寸話して一所に出て、青山で別れて帰ると、昌生叔父様が出て来て居られる。

#### 二十一日

昌生叔父様は朝のうちに帰られる。午後、動坂の松平へ行き、小石川へ行って来る。

#### 二十二日

朝から相変わらずぽつ～降って居たが、午前には霧れて日が輝く。直き近く六百十九番地に引越す。

二十三日

引越しして来た日でした  
 私達は三丁とは離れない所から  
 話しにすれば鼠が引くように  
 一日かかってばつりばつりと  
 幾度にかつまらない荷物を運びました  
 底寒い雨風が吹いて  
 バラバラとやって来た夕立がいってしまふと  
 ひっそりとした夜が来ました  
 小さいながらに  
 新らしい家には木の香がかほり  
 青い畳も何となく嬉しく思はれます  
 建具も揃はないので  
 電燈がやたらと見えすいて明る過ぎるのも  
 何か淋しい気持です  
 今迄は音にばかり聞いて居た汽車が  
 時たまに通りかかると  
 心持程ではあってもぶる～と  
 お腹の底から揺れるようにさへ思はれます  
 ま近に田畠らしいものもないのに  
 何処からともなく  
 数知れぬ蛙がひっきりなしに鳴き立てます  
 そんな静かな夜  
 若い奥さんが明日の朝を思ふのでせう  
 吸上ポンプの音がだるさうに  
 泣くように、又慎ましやかにも響きます  
 私はあたりを見まはして  
 まだ居所にをさまらないでちらかったものを  
 無雑作にお櫃に投げこまれた台所ものや  
 型ばかりの床の間にまつられた神様や  
 白木の棧ばかりの障子によせてある  
 新らしい簾や  
 総べてさう云った中途はんぱな姿を  
 さながら私の心のように  
 けれどもうひうひしく、明るい心で眺めます

〔謡〕  
あゝ、そんな莫然とした祈り心地で  
早く床に就きましたが  
まるで違った明日をむかへるような  
数々の小さな望が  
ごっちゃになって私の心を  
そっとゆすったり、ひきしめたのもひとしきり  
慣れない思ひにきつく労れて居たのでせう  
ぐっすりと寝入って了ったのでした

〔×を附す〕

---

天気はいいが、自分は本郷から神田へと追まはされ、安場を訪ね、本多の家に行って、夜中に家に帰って来る。

二十四日

午後、松平へ、江波へ。夕方から雨。

---

そりやまったく君の云ふ通り  
あの娘は若くもあるし綺麗でもあるさ  
だが、それが何だい  
あいつは大人にもならないくせに  
子供でもなくなつて了つたのさ  
あいつは自分でもう子供ではないなどと考へて  
あの通り「私はもう子供ぢやないのです  
腮の下に手を入れたりしては貰ひますまいよ」  
あのすまし方と来たら全くそんな風ぢやないか  
そのくせあいつは自分でもって  
やきもきして願つてゐるものを見定したり  
蔑んだり、恐れたりして  
どっちつかずの真中に立つて顛えて居るのさ  
何、そこが可愛いのだって？  
そこがきたならしいのさ  
あいつは人の目の後に行つては  
どんなことだつてしかねないのさ

あいつは笑ったり、露骨に喜んで見せたり……  
 あばづれのしょうばいにんだって横を向くだらうよ  
 何、で俺達も目の後に行って  
 笑ったり、露骨な喜びに気違ひになったり……?  
 あゝ、そりやいいお慰みだ  
 君の好きなように  
 あいつの喜ぶようにしてやり給へ  
 だが僕は  
 あいつが子供なら腮の下に手を入れてやりたいのさ  
 あいつが自分で大人のつもりなら  
 はじめから泥の中に首でも突込んで来てほしいのさ

## 二十五日

雨は止んで、キラ～と爽やかな朝が明ける。  
 午前中は惜しい程だったのが、午後雷鳴。恐ろしいような風と共に、恐ろしいような  
 駆雨が四五回やって来る。而して夜は又、静かな——相変らず蛙が一面の地が鳴くよう  
 に鳴いて居る。午頃、梅子叔母様が来られる。

## 二十六日

松平と小石川へ行って来る。

[一頁白紙]

土方久功

上目黒二一九八  
 □□□□□□□

一九二三

十二月二十七日  
 杉並村六六三  
 □□□□□□

一九二四

五月二十二日  
 杉並村六一九

